

“Immature poets imitate; mature poets steal”

——テクストの／における〈海賊行為〉にかんする予備的考察

三原 芳秋

作品は、それが作品であるかぎり、かならず生に袋小路からの出口を教え、
敷石と敷石の隙間に一筋の道を通してくれるものです。

——ジル・ドゥルーズ

定義一

〈テクスト〉とは、せめぎ合う意味作用の諸力が織りなす差延的な痕跡の構造があるところではどこに
でもあ、るもの、と解する。⁽¹⁾

説明

わたしは、「テクストとは・・・である／でない」とは言わないで、「・・・があるところではどこに
でもあ、るもの」と言う。なぜなら、本試論が取り組もうとする〈問い〉は、「テクストとはなにか」
ではなく、「テクストがあ、るとは、どういうことか——いったいいかなる存在の仕方においてテクスト
はテクストとしてそのつ、ど存在するのか」という単純な〈問い〉だからである。そこで、プラグマ
ティックに〈戦略的〉に「どこにでもあ、る」と言うことには、テクストの限界線の「外部」に〈意

味」といった) なにものかがあるという主張を、さしあたり、封じ込めておく効果がある。

定義二 〈海賊行為〉とは、ある法Ⅱ秩序が支配する領域の外部に出自を有する侵犯行為のうちで、その法Ⅱ秩

序によっては行為主体が特定できない(Ⅱ特定の「敵」として同定しえない)⁽³⁾もの、と解する。

公理一 〈テキストの外部〉なるものは、ない。

公理二 〈海賊行為〉は、内部と外部が互いに互いを決定しえないような未分化の領域⁽⁴⁾を作り出す。

定理 テキストの〈海賊行為〉なるものは、ない。

証明 〈海賊行為〉は、内部／外部の分割を前提とする(定義二および公理二により)。他方、〈テキストの外部〉なるものは、ない(公理一により)。ゆえに、「テキストの〈海賊行為〉」なるものもまた、ない。Q.e.d.

備考一 しかし読者の多くはおそらく、〈テキスト一般〉〔「一般的テキスト」〕などと大仰にかまえずに、現に目の前にある個々のテキスト(「フェノⅡテキスト」[pheno-texte])における〈海賊行為〉について語るのがむしろ穏当である、と思うことだろう。現存するひとつのテキストがそれ自身の境界線によって囲まれた個体であると想定することができれば、そこに、内部(このテキスト)／外部(他のテキスト)の分割を見出すことができる。すると、常識的に考えて、あるテキストが、先行する(または同時代的な)他のテ

クストと関係をもつ際に生じる、ある種の境界侵犯行為（剽窃、改竄、など）を取り扱うべきである、ということになるだろう（間テクスト性 [intertextualité] の問題）⁽⁵⁾。

「間テクスト性」という用語ならびに概念は、通常、ジュリア・クリステヴァの発案になるとされる。

しかし、クリステヴァ本人のちに不快感を隠しえなかったように、それはしばしば、たんなる⁽⁶⁾

「典拠探し」に堕しがちである。あるいは、多少「理論」的装いをもって「影響の不安」（ハロルド・ブルーム）が語られることもあるが、その（強い主体）間におけるオイディプス・コンプレックスの物語と、

「主体の外にあり、時間の外におかれた場」である「ジェノ＝テクスト [gêno-texte]」の実在性を基盤とする「間テクスト性」の理論とは、まったくもって似て非なるものである——

ジェノ＝テクストは、構造化されたものでもなく、構造化するものでもないから、そこには主体と
いうものはない。主体の外にあるのだから、主体を無化する否定項でさえない。というのは、ジェ

ノ＝テクストは、主体の手前と彼方で作用する、主体の他者なのである。主体の外にあり、時間の
外におかれた場（主体も時間も、それらを貫く広大な機能の働きの副産物のように現れてくるにすぎない）

であるジェノ＝テクストは、言語の歴史と、その歴史が認識しうる意味実践の装置 [dispositif] と
して表わされうるであろう。現にあり、これから現われてくる具体的な言語すべて [toutes les
langues concrètes existantes et à venir] のもつ可能性が、フェノ＝テクストとして仮面をつけ、検閲
されて定着する前に、ジェノ＝テクストのなかに「与えられて [données]」いるのである。

〔定式の産出〕『セメイオチケ 一』一七二頁

「典拠探し」や「影響の不安」においては、それぞれ個別の〈作品〉や〈作家〉という実体化された単
位を基礎として時間軸に沿って先行者と後発者との関係が組上に載せられるのに対し、「間テクスト

性」が対象とするのは、すでに現働化されている(フェノ＝)テキスト——《作品》や《作者》も、当然ここに含まれる——のみならず、来たるべき(ε)venir」テキスト、すなわち、いまだ現働化されていないテキストの「すべて」——潜在的全体性であり、そこにおいて記述が試みられるのは、「時間の外」⁽⁸⁾にある「潜在的無限性」[infinite potentielle]における連結のメカニズム」(パラグラムの記号学のために)『セメイオチケ 一』(一六頁)ということになる。そこでは、直線的な時間軸上に相前後する狭義の「テキスト」(フェノ＝テキスト)のあいだの対一対応——すなわち、権力 [potestas] 関係——の東が問題となっているのではなく、フェノ＝テキストという「現象」のうちに登記 [inscrire] されるジェノ＝テキストという「潜在的無限性」——すなわち、無限集合の「濃度」[puissance = 潜勢力・力能 potential]——が問われているのである——

テキストは言語現象ではない。いいかえれば、それは、平板な構造とみなされている言語資料体として現れる構造化された意味作用ではないのである。それは、意味作用の産出である。この産出は、言語「現象」、フェノ＝テキストのなかに記載 [inscrire = 登記] されている。フェノ＝テキストは、印刷されたテキストにはちがいないが、それを読みとるには、(一)その言語カテゴリーの、(二)意味を産む行為のトポロジーの創出をとおして垂直に、遡ってゆくことが必要とされるのだ。だから、意味産出は二重に、(一)言語の織物の産出、(二)意味産出を提示する身構えをしている「わたし」の産出、として捉えることができることになる。この垂直線に切り開かれるもの、それはフェノ＝テキストの生成 [generation] という(言語的)操作である。この操作を、われわれは、フェノ＝テキストと呼ぶことにしよう。したがって、テキストの概念は、フェノ＝テキストとジェノ＝テキスト(表面と地、意味された構造と意味を産む生産性)とに二重化される。

〔「定式の産出」『セメイオチケ 一』一六六頁〕

クリステヴァが、バフチン論において、〈テキスト〉がこのようにして「垂直線」に貫かれてある事態を「対立するものの併存〔ambivalence〕」と呼び、そこから「間テキスト性」の概念を案出したことは、周知の事実だろう。「間テキスト性」理論が凝視しているのは、(狭義の)現象としての／フェノロジー テクスト同士の(水平的な)影響関係ではなく、フェノロジー テクストとジェノロジー テクストの(垂直的な)〈あいだ〉——テキストと生との〈あいだ〉⁽⁹⁾の領域——すなわち、〈あいだ〉としての〈テキスト〉なのである。

ここで、ベルクソンの記憶論——「潜在的共存としての記憶」(ドゥルーズ)の存在論——を引き合いにだすのは、きわめて妥当なことであると思われる。ベルクソンが「純粹記憶」という〈潜在的な全体性〉を導入することによって「存在論への飛躍」を敢行したのとまったく同じことが、クリステヴァの「間テキスト性」においてもなされていると考えられるからである——

したがって、特定の現在の特殊な過去でないような《過去一般》が存在する。この過去一般は、存在論的要素としてあり、永遠でつねに存在する過去であり、あらゆる個別的な現在の《通過》のための条件である。あらゆる過去を可能にするものは、この過去一般である。ベルクソンは、われわれはまず第一に過去一般のなかにおのれを移行させると言っている。このようにして彼が記述しているのは、存在論への飛躍である。われわれは、存在、即自存在、過去の即自存在のなかへと実際に飛躍するのだ。

(ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』五七―八頁)

《過去一般》は、現象学的分析を始動させるために指定されるリクルールの「留保」⁽¹⁰⁾のたまものではなく、あくまで「存在論的要素」として実在し、その「過去のなかにわれわれはただちに身を置く」⁽¹¹⁾こと

から始める点が強調されなければならない。そのうえで、ベルクソンの「純粹記憶」＝《過去一般》を参照することにより、「主体の外にあり、時間の外におかれた場」である「ジェノ＝テキスト」の地位が明確になるとともに、「間テキスト性」理論の存在論的——ひいては、生命論的——射程が正確に捉えられるということについて、もはやこれ以上の贅言は要しないであろう。

では、「表象しえないけれども実在する無限、[*infinité réelle impossible à représenter*]⁽¹²⁾」——メルロ＝ポ
ンティが「[*invisible est là sans être objet*]⁽¹³⁾と研究ノートに書きつけ、ドゥルーズが好んで引用するブ
ルーストが「*réels sans être actuels*」⁽¹⁴⁾と表現した次元——に臨んで、現実にある「[*actuel*]」狭義の（フェ
ノ＝）テキストのみが与えられているわれわれにとつて、この「存在論的飛躍」——クリステヴァの言
う「垂直に遡ってゆくこと」——を敢行するための契機は、いかにして見出されるのだろうか。

その契機は、個々のテキスト読解において「侵犯」[*transgression*]、「(不法)侵入」[*effraction*]、「(突発
的)侵入」[*irruption*]などの語彙で表現される事態——「境界は、ル・サンボリックのなかへのル・セ
ミオティックの流入」[*afflux*]によつて、取り返しのできないほどに揺さぶられる「[*irremédiablement
secoué*]⁽¹⁵⁾」といったような、すぐれて〈海賊的〉な事態——の痕跡として、テキストのそこかしこに刻
みこまれている。この痕跡に切りこみ、一気呵成に「垂直に遡ってゆくこと」が、「存在論的飛躍」に
つながるはずだ。より実践的に言えば、(フェノ＝)テキストのうちに「異質性」[*hétérogénéité*]を発見
し、それがジェノ＝テキストによつて「垂直線に切り開かれ」た亀裂であると直観する、ということに
なるだろう。⁽¹⁶⁾

ピエール・バイヤールの、一見すると奇をてらっただけの言葉遊びとも思える「前もつての剽窃」[*le
plagiat par anticipation*]という概念も、このような観点から捉えなければならない。英語圏の読者には

なじみの深い「シェイクスピアにたいするT・S・エリオットの影響を研究しているんです」という、研究者を小ばかにしたような自己紹介を題辞に掲げた、二〇〇九年に上梓された好著『前もつての剽窃』は、たとえばソフォクレスの『オイディプス王』が、二千年後にフロイトにより「発見」されるオイディプス・コンプレクスや探偵推理小説の技法といったものを「前もつて剽窃」していたと、言葉のあやではなく額面通りに主張する。その他にも、ジョイスやヌーボ・ロマンを気ままに剽窃するローレンス・スターン、ブルーストを剽窃するモーパッサン、『シャーロック・ホームズ』を剽窃するヴォルテールのコントなど、本書の魅力はその多彩な事例の数々にあるのだが——そちらは、今後の邦訳・紹介を待つこととしよう——ここでは、このような奇矯な主張の根拠となっているバイヤールの歴史観、すなわち、「互いに異質的で両立しない」[heterogènes et non conciliables]「真理の体制レジームに従う二つの歴史」(二一七頁)という考え方に焦点をあてたい——

十分な厳密さを望むなら、「歴史家が諸事件を時系列に沿って記述するような」出来事出来事の歴史、[histoire événementielle]と文学の歴史、[histoire littéraire]とをきつぱりと切り離し、作家や芸術家は実際に二重の時間性、[une double chronologie]に属していることを認める決心が必要だ。創作家は、自分が生きる時代のまったき市民であると同時に、他なる時間 [un autre temps]——それ固有のリズムに従う文学や芸術の時間——にも同等の権利をもつて所属しているのである。

(二〇八頁、拙訳)

この「二重の時間性」においては、前者の意味での同時代者とのあいだに生じる不協和 [dissonance] や異質性 [hétérogénéité] の感覚が、かえって後者の意味における時空を超えた同時代性——「前もつての剽窃」——を保証することになる。バイヤールが導きの糸としているボルヘスのエッセイ「カフカ

とその先駆者たち」の(より穏当な)言い回しを借りるなら、「それぞれの作家が自らの先駆者を創造する」——「カフカがもし何も書いていなかったら、われわれはそうした『先駆者たち』の作品がもつカフカの」特徴に気づかなかつたにちがいない。つまり、そうした特徴は存在しないということなのだ」(二五六頁)——ということになるわけだが、バイヤールのテーゼのラディカルさは、「固有のリズム」を有する「他なる時間」の实在を「きっぱり」と「une fois pour toutes」認める決心を要請するところにある。

この「二重の時間性」への〈信〉〔*foi*〕は、すぐれてベルクソン⇨クリステヴァ的な「存在論的飛躍」であるといえる。たとえば、ベルクソンがデジャ・ヴュ——知覚における「前もつての剽窃」——の分析から導き出す「知覚と記憶〔*souvenir* ⇨ 想起〕の二重化〔*dédoublement*〕」の図式は、この相同性をよくあらわしている——

私たちの生のすべての瞬間は二つの面をもつ。現実態〔*actuel*〕と潜在態〔*virtuel*〕、知覚の面と記憶の面である。私たちの生はあらわれると同時に分裂する。というより、分裂することにおいてあらわれる〔*il consiste dans cette scission même*〕。〔どうのの〕「すでにない直前の過去といまだない未来とのあいだの逃げ去る境界〔*limite fuyante*〕」として進行してやまない現在の瞬間は、知覚をたえず記憶に映して動く鏡でないとしたら単なる抽象に還元されるだろう〔*からである*〕。

〔現在の記憶と誤った再認〕『精神のエネルギー』一三六頁

この引用箇所が続いて、「日付を持つておらず、今後も持つておらず」という「過去」一般〔*le passé en général*〕の概念が導入されるが、これはバイヤールの「他なる時間」とともに、ここまで論じてきた〈潜在的な全体性〉と「同じ濃度〔⇨力能〕」を持つものと考えられるだろう。そして、「潜在的なも

の [virtuel] として、この想起 [souvenir] は、それを引き寄せる知覚によってしか現実的なもの [actuel] となりえない」一方で、「イマージュへと現実化された想起 [le souvenir actualisé en image] は、この純粹想起とは根底的に異なっている」〔物質と記憶〕一七一―二頁、二〇一頁) ために、「私たちの生」は、「分裂そのもの [scission même]」の相の下においてのみ捉えることができるのである。

ここでクリステヴァに話を戻せば、すでに引用した「テクストの概念は、フェノ＝テクストとジェノ＝テクストとに二重化 [dédoublant] される」という定式が、この存在論的〈信〉をテクスト理論に〈翻訳〉したものであり、また、その理論を発展させつつ「分裂そのもの」としての現実 (現働) 的存在様態を動的に表現したのが (これまたすでに引用した) 「境界は、ル・サンボリックのなかへのル・セミオティックの流入 [afflux] によって取り返しつかないほどに揺さぶられるのだ」という観察である、と言えるだろう。クリステヴァは、さらに、この理論的観察を、より実践的に「意味生成の過程＝訴訟 [le procès de la signifiante]」として分析している――

ル・セミオティックは、根源的にル・サンボリックの条件ではあるのだが、意味実践においてはル・サンボリックへの侵犯 [transgression] の結果として機能する、とさしあたり言っておこう。であるからして、シンボル化に「先立つ」ル・セミオティック (という言い回し) は、記述の必要から正当化されるに過ぎない理論的仮説にほかならない。実践的な場面では、ル・セミオティックはル・サンボリックに内在しており、われわれが音楽や詩のような実践のなかでル・セミオティックに認める複雑性 [complexité = 無数の襞 [pli]] が折り畳まれてあること) の分節＝接続には (ル・サンボリックによる) 切断 [coupure] が必要とされるのだ。(中略) この切断のあとに (をもとにして) 再帰的に産出されるル・セミオティックは、ル・サンボリックにおける欲動の機能性の「第二の」回帰

として、シンボル秩序に導入される否定性として、シンボル秩序の侵犯として、表象されなければならない。〔詩的言語の革命〕六七～八頁、翻訳は適宜変更した)

「ル・サンボリックにおけるル・セミオティックの炸裂〔explosion〕」とも表現される、この「侵犯」の否定性は、「ル・サンボリックによる」切断によって措定される「定立相〔a phase théique〕」の否定(＝否定の否定)として(ヘーゲルのに)理解されてはならない——なぜなら、それは、「切断」以前の実体化につながりかねないから——とクリステヴァは釘をさす。定立的措定の際に生じる矛盾を止揚するのではなく、「この措定自体を創出した矛盾」を「逆しまに再活性化〔une reactivation à rebours〕」するのが、この「侵犯」の正体なのである。

ここにおいて「芸術」——その範例が「詩的言語」である——が特権化されることには、十分な正当性がある——

「芸術」の本領は、侵犯の否定性によって定立を碎き潰し〔pulvérisant〕ながら、定立もまた手放さないというところにある。これが定立を侵犯する唯一の方法であり、否定性の襲撃をうけてなおシンボル機能を維持する困難さを踏まえて、テキストの実践が主体に対して示す危険をはかることができる。われわれにテキストの機能のはたらきに内在するフェティッシュ化として映ったものが、いまでは否定性にブレーキ〔freine〕をかけて、鬱滞として定位させ、シンボルの措定を一掃してしまわないように計らう、構造的に不可欠の防御物として現れる。

(六八頁)

シンボル秩序を粉碎〔pulvériser〕しつつ歯止め〔frein〕の役も果たす「芸術」——ここでクリステヴァは、文化人類学の知見を取り入れ、「供犠」と「芸術」との構造的な連関に議論を進展させ、「テキストの実践」という課題が、シンボル秩序への「享樂の流入〔afflux de la jouissance〕」一般の問題へと接続

される——

芸術——このル・サンボリックのル・セミオティック化——は、こうして言語のなかへの享楽の流入を表わす。供犠がシンボルと社会の秩序のなかに享楽の生産的な限界〔*limite*〕を指定するのに対して、芸術は、享楽がその身を守りつつこの秩序に浸透するための（唯一の）方途を明確にしている。つまり、この秩序に亀裂を走らせ〔*fissurant*〕、切断線を刻みこみ〔*couper*〕、語彙、統辞さらには語そのものをも変形し、その下から、声と身振りの差異がもたらす欲動を取り出すことによつて、享楽が社会——シンボル秩序を突き抜けて導きいれられるのだ。言語が社会——シンボル秩序のなかに享楽を導入するのに適していること、定立はかならずしも神学的供犠を前提としないこと——これこそ、供犠に向き合った詩が言わんとしていることなのだ。（八〇頁、翻訳は適宜変更した）

ここにいたって、テクストの問題は、通常の意味での「（狭義の／フェノリ）テクスト」の問題ではもはやありえず、「社会秩序の存続と革命の条件にはかならない」とまで断言されることとなる——

言語と社会に向きあつて詩が出会うのは、定立的なものと呼び起こす供犠ではなくて、定立そのもの（論理——言語——社会）なのだから、詩はもはや「詩」としてとどまるだけではすまされない。それは、定立の措定をとおして定立と享楽が対決する明白な場となる。いいかえれば、言語の秩序自体のなかへの欲動の疎通〔*travage* 通道〕を明示するための恒常的な闘いとなるのだ。（中略）すでに閉じたとはいわずとも縫合された〔*suture*〕この社会——シンボル秩序のなかにあつて、詩は——より正確に、詩的言語は——すではじめから自分の機能であつたものを喚起する。すなわち、ル・サンボリックを横断しながら、それに働きかけ、それを貫通し、その脅威となるようなものを導き入れるということだ。いいかえれば、社会秩序の内部でそれにさからつて、無意識理論が探求し、

詩的言語が実践しているもの、つまり社会秩序の変革あるいは顛覆の究極の手段、社会秩序の存続と革命の条件にはかならない。

(八一〜二頁、翻訳は適宜変更した)

詩的言語——ここではひろく〈テキスト〉ととる——が、社会—シンボル秩序のなかで道を拓く [Frayer] と、そこに「享楽 [jouissance]」の生命—生殖的奔流がおしよせる——ここで、Frayer には、「卵に精液をかける」という意味もあることに注意しておこう。そこは、定立と享楽——フェノ—テキストとジェノ—テキスト、「現働化された」個」と「潜在的無限性」——の恒常的な闘争の場となる。そして、その恒常的な闘争 (「書くこと—読むこと」⁽¹⁹⁾) においては、「無限に対して置かれる境界石 [une borne a l'infini]」(クリステヴァが好んで引くマラルメのことは) に〈ふれる〉という「カタストロフィック」な経験 (坂部恵⁽²⁰⁾) が不断にくりかえされるのだ。

テキストは、もはや、一個の《例外状態》だ。あるテキストが他のテキストに〈海賊行為〉をはたらくのではなく、テキストが、フェノ—テキストとして現働化するかぎりにおいて、つねに・すでにジェノ—テキストの (不法) 侵入 [effraction] に曝されているという意味で、その存在自体が〈海賊行為〉そのものなのだ。〈剽窃〉についても、もはや、時間軸にそって後発者が先行者のテキストを「盗む [steal]」という他動詞的—能動態的認識が問題なのではなく、テキスト内の〈異質性〉が開く「亀裂」や「切断線」を抜けて「他なる時間」が忍び込んでくる [steal into / sich stehlen] という〈中動態〉の経験——その相互嵌入的な場が「前もっての剽窃」を可能にする——こそが問題なのだ。これが、存在論的—中動態的「間テキスト性」理論が要請する結論であり、この結論に従って、本試論冒頭に示した「定理」を代補する「系」が付加されなければならないだろう。

備考二

先へ進む前にここで、本試論のタイトル「未熟な詩人は真似る、成熟した詩人は盗む」について説明しておこう。この格言は、T・S・エリオットの書評「フィリップ・マッシンジャー」(一九二〇)⁽²¹⁾からの「借用」である——そして、それ自体もまた、若きエリオットが味読したであろうラルフ・ウォルド・エマソンからの「借用」と考えてさしつかえはないだろう。マイナーな出典⁽²²⁾そのものは忘れられ、印象的なフレーズだけが生き残り、文脈が知られぬまま論文に引用されたり大学院入試で使用されたりする、典型的な例である。まずは、その文脈ごと訳出しておく——

〔詩人の優劣をはかる〕もつともたしかなテストのひとつは、詩人が借用する〔borrow〕その仕方をみることだ。未熟な詩人は真似る〔imitate〕、成熟した詩人は盗む〔steal〕。拙い詩人はそうやって手に入れたものを台無しにしてしまうが、巧い詩人はそれをより良いなにか、すくなくともなにか違ったものに、変えてみせる。巧い詩人は盗品を溶接して、盗んだ元の作品とはまったく異なるユニークな感情の統一体〔a whole of feeling〕に仕上げるが、拙い詩人はそれを、ばらばらでまとまりのないなかに放り込んでしまう。そして、巧い詩人は、たいてい、遠い昔に生きていたり、異質な言語で書いていたり、関心が一致しなかったりする作家から、借用するものなのだ。

(The Sacred Wood' 一二五頁、拙訳)

これは、言うまでもなく、目下準備中の長編詩『荒地』(一九二二)における前代未聞の盗用行為を自己正当化するくだりとして読むことができるとともに、前年冬に執筆され後世に圧倒的な影響力を持つことになる「伝統と個人の才能」(一九一九)で展開された「理論」の反響を聴き取ることができる⁽²⁴⁾。先行するテキストから「借用」する——テキスト「内部」への「外部」の侵入を許す——際に「(巧い詩人が)盗む」のと「(拙い詩人が)真似る」のとの決定的な差は、後者が「まとまりのない」(no

cohesion)」なか(内部)に模倣品(外部)をただ放り込むだけなのに対して、前者は、「盗品」(外部)を「なにか違ったもの [something different]」に変容させ、もとはまったく違うユニークな「感情の統一体」(全体) [a whole of feeling] (内部)のなかに「溶接する [weld]」能力を持っていることにある。先行テクストからの剽窃(借用)は、もつとも素朴な意味において〈海賊行為〉の一種であり、剽窃者の巧拙にかかわらずなく同断であると感じられるむきもあるだろうが、エリオットはそれを質的に腑分けしているのだ。本試論冒頭の定義に照らしてみれば、内部と外部のあいだになんらの接合 [cohesion] も生じない「真似る」は〈海賊行為〉の名に値しないのたいして、「盗む」のほうは、内部と外部の「溶接」の過程で「未分化の領域」が——たとえ灼熱の刹那の出来事であるとしても——生じるという意味で、すぐれて〈海賊行為〉的であると、とりあえずは言えそうである⁽²⁵⁾。

実際にエリオット自身、この「変容」をともなう「溶接」の過程を「危機 [crisis]」——臨界点Ⅱ批評の地点 [critical point] に通じる——と表現している文章がある。盟友エズラ・パウンドが編集する『エゴイスト』誌に連載していた「現代詩にかんする省察」の最終回(第四回、一九一九年七月号)で、同誌の次号(九月号)に発表する「伝統と個人の才能」の「下書き」ともいえる書評である。このマイナーな文章は、後年エリオットの文芸批評の代名詞ともなる「伝統論」に少なからぬ痕跡を残すものであるとともに、ある重要な意味において、その「伝統論」の正典化 [canonization] の過程で「抑圧」されたものだともいえる⁽²⁶⁾。冒頭、例によって個別の書評に入る前に詩作にかんする一般論が展開されるわけだが、そこで、駆け出しの詩人が先達ととり結ぶ関係性について、「賞賛が模倣につながる」のとは質的に異なる関係性がある、としたうえで——

わたしが言うところの、この異なる関係性において(他の)作家とあい対するとき、わたしたちは

その作家を模倣〔imitate〕しはしない。もちろん、模倣の罪を着せられることはおおいにありうることだが、そのような告発に狼狽するいわれはまったくない。この関係性とは、他人——おそらくは、すでに鬼籍に入っている作家——とのあいだに生まれる深い血縁関係〔profound kinship〕、いやむしろ、奇妙な私的親密さ〔a peculiar personal intimacy〕の感覚である。その関係は、唐突にわたしたちを圧倒するかもしれない——それが起こるのは、出会ったその瞬間かもしれないし、長くつきあつた後のことかもしれない。それは、たしかに危機にちがいない。若い作家がこの手の情熱に はじめて捕らわれるとき、その若者には変化〔changed〕が、ほとんど変身〔metamorphosed〕といつてもいいような変化が、それもほんの数週間うちに、訪れるかもしれない。（六六頁、拙訳）

このようにして、「死者〔死んだ男〕とのあいだに交わされる、この秘密の知恵〔this secret knowledge〕、この親密な関係〔this intimacy〕」が、あきらかに（同）性愛的なメタファーにのせて——また、暗にオカルト的レトリックを用いて——語られていくが、それが最終的には「伝統」と結びつけられることになる——

すばらしい愛人同士、というわけにはいかないかもしれない。しかし、大小の差はあれ真の詩人とのあいだに純粋な愛人関係〔a genuine affair〕を持つという経験があれば、ほんとうは恋に落ちてはいないときに（偽りの関係を）回避するための警告装置を手に入れたことにはなるだろう。さらに、間接的にはあるが、ほかにも得るところがあるはずだ。わたしたちは、この交友〔friendship〕によつて、その友人が活動の場としている社交界への入会〔an introduction to the society〕を許されるだろう。その起源と終末〔its origins and its endings〕を学ぶことになるだろう。そして、わたしたちは広げられるのだ〔we are broadened〕。わたしたちは真似をする〔imitate〕のではない、変化さ

せられる〔changed〕のだ。すると、わたしたちの作品は、変化した者の作品となる。わたしたちは借用〔borrow〕したのではない、奮い勃たされた〔quickened〕のだ。こうして、わたしたちは、伝統の担ぎ手〔bearers of a tradition〕となる。(六七頁、拙訳)

こうして若者は、外部から唐突に、暴力的に侵入してくる過去のテクスト(「死んだ男」)にその身を開き、受け入れ、そのテクストを「盗む」行為によって変容させつつ自らも「変身」し、そして、このイニシエーションを経て「伝統の担ぎ手」となる。⁽²⁸⁾かくして、この(同)性愛的・オカルト的比喩≡乗り換え(metaphorein = trans-port)⁽²⁹⁾によって、テクストを「盗む」(海賊)行為は、「伝統論」に接続される。

こういった秘教的な接続を垣間見れば、エリオットの描き出す「盗む」行為のダイナミクスと「伝統論」のメカニズムとのあいだに同型性を見出すことが可能であることにも、納得がいくだろう。伝統とは、たんに受け継がれるものではなく、個々人が「たいへんな努力をはらって」自ら獲得しなければならぬものである、とする「伝統と個人の才能」のエリオットは、そのようにして伝統の「内部」に参入してくる新参者が「先行するすべての芸術作品」によって構成される(全体)ととり結ぶ関係を、双方向的でダイナミックなものと捉えている――

既存の記念碑的作品群〔the existing monuments〕は、お互いのあいだで理想的な秩序を形成しているが、新しい(真に新しい)芸術作品がそれらの中へ投じられることによって、変化をこうむる。新たな作品があらわれる以前に既存の秩序は完結しているわけだが、新奇なるものの侵入の後にも秩序を保つためには、既存の秩序の全体〔whole〕が――たとえ、ほんのわずかであっても――変容しなければならぬ。そのことによって、それぞれの芸術作品が全体〔the whole〕にたいして持つ関係・均斉そして価値といったものが再調整されるのだ。これが、古きものと新しきものとの調

和 [conformity] なのである。

(The Sacred Wood' 五〇頁、拙訳)

一見すると、後発の詩人が先行作品から「盗む」ことと、既存の作品群がなす〈全体〉が新参者を受け入れることとは、ヴェクトルが真逆のように思えるかもしれない。しかし、〈思考の型〉という意味では、既存の秩序を保つ「内部」(〈全体〉A) ↓ 「外部」からの侵入／との接触による〈全体〉的変容 ↓ 「内部」における秩序の再調整 (〈全体〉A) という (弁証法的³⁰) 展開は、まったく同型と言える。その意味では、「盗む」行為のうちに、「変身」という個人の人格・存在を「危機」に追い込むような潜勢力が秘められていたのと同様に、保守的文学理論の代表とみなされがちな「伝統論」にも、潜在的には、ラディカルで破壊的な性格があるのではないか——「伝統論」を(「海賊行為」論)に読み替えることができるのではないかと予想されてしかるべきである。むしろ、上に図式化した〈思考の型〉は、強調点を「変容」におくか「再調整」におくかで、現実には対蹠的な結果(「誤読」³²)を生むことが推論されるわけだが、ここではあくまで、その危機³¹批評的(「潜在性」)の次元を探ってみたい。

「伝統論」の〈潜在性〉の次元を考えるうえで鍵になるのは、繰り返して出てくる〈全体 (the whole)〉という用語⇨概念であろう。才能ある個人が「伝統的」となるための条件として、エリオットは「歴史的感觉／意識 [a historical sense]」——「過去の過去性のみならず過去の現在性をも知覚する [a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence]」センス——を持つことを挙げている。さらにその前提となっているのが、過去の芸術作品〈全体 (the whole)〉が「同時的 [simultaneous] 存在」として「同時的秩序」をなしている、という事実である。この発想は、おそらく、ベルクソンの記憶論からヒントを得た(「盗んだ」)ものであろうと考えられる³³。そして、ちようどベルクソンの「潜在的共

存としての記憶」という概念が「存在論への飛躍」というラディカルな切断をもたらしたように——この点については「備考一」で詳述した——エリオットの「伝統論」も、高度に存在論的な——つまり、ベルクソン＝クリステヴァ的な——テクスト論につながる潜在性を秘めている、とはいえないだろうか。実際、文学伝統の〈全体〉はつねに「変化〔change〕」の相にありながらも、その「変化」とは「途上」でなにもを遺棄することのない、つまりシエイクスピアやホメロスや旧石器時代の岩絵やらを時代遅れとして放擲することのない、そのような展開〔development〕のことであると考える方は、ベルクソンの言う「真の記憶〔*memoire vraie*〕」やバイヤールの言う「他の時間」〔文学の歴史〕に通ずるところがありそうだ——

もう一方が、真の記憶である。意識と同じだけの伸張を有したものとして、この記憶は、われわれの諸状態が生じるにつれて、そのすべてを記憶に留め、それぞれを次々に併置するのだが、その際にこの記憶は、各々の事実とその場所を与え、ひいては各々の事実を日付を刻み、第一の記憶のようにならに再開される現在のなかではなく、決定的な過去のなかでまさに現実に活動している。

〔物質と記憶〕二二六―七頁

過去の芸術作品すべて（＝芸術の「記憶」を（潜在性の次元に）蓄積し続ける〈全体〉——それは必然的に、〈潜在的な全体性〉となる——を「伝統」と呼ぶとき、この「伝統論」は、もはや、あれやこれやの伝統の種類・性質を問う認識論ではなく、〈潜在的な全体性〉とその現働化を問う存在論とならざるをえないであろう。「歴史的感觉／意識」は、一方向に流れる歴史的〈時間〉とはなんらかかわりのない、ベルクソンの提示する「純粹持続」の直観とならざるをえないであろう。すると、クリステヴァの「間テクスト性」理論のターゲットが現存する個別テクスト間の眼に見えるやりとりにあるのではなく、

「潜在的無限性」——無限集合の「濃度」[puissance＝潜勢力・力能]——としてのジェノ＝テクストが、フェノ＝テクストとして現働化（顕在化）しつつそのフェノ＝テクストのそこかしこに（不法）侵入〔effraction〕を繰り返して〈危機〉の領域を開くものであったことのアナロジーとして、一見保守的なエリオットの「伝統論」も、〈潜在的な全体性〉としての「伝統」と現働化のエージェントとしての「個人の才能」との〈あいだ〉——「互いに互いを決定しえないような未分化の領域」——に掉さす存在論＝生命論的〈海賊行為〉論である、ということになるはずなのである。

しかしながら、エリオットは、詩作においてはウパニシャドから仏典まで自由に「盗む」習慣を持っていたにもかかわらず、「伝統論」においてはその〈全体〉を「ヨーロッパの精神」と名指す（「決定」することによって、「潜在的共存」という「存在論への飛躍」の可能性を台無しにしてしまった。さらに、「記念碑」[monuments]の比喩——語源的にも「記憶に値するもの」という選択的価値判断を示唆する⁽³⁴⁾）を用いたうえで、その〈記憶に値するものたちの集合〉への「適合」[fitting in]の度合いが「作品の価値の指標となる」と断定するに至っては、もはやこの「伝統論」は純然たる「正典」[canon]イデオロギーの表明であり、後年の「古典主義」さらには「正統主義」[orthodoxy]へと道を拓くものとなっている。こうして、「テクストの存在論」——ベルクソンの思想的展開のアナロジーでいえば、「テクストの生命論」——の〈約束〉は裏切られ、個々の作品の価値的序列化（正典化〔canonization〕の問題⁽³⁵⁾）に帰着する。潜在的〈海賊行為〉としての「伝統論」も、〈潜在性〉（存在論的力能〔potentia〕）の次元をうししない、序列化する境界線引きとその攪乱（および再統合）という、あくまで現象面における権力〔potestas〕関係によって規定されるものとなる。これを〈海賊論〉的に言いかえるならば、《例外状態》の常態化としての〈海賊〉的「伝統」——そして、その潜勢力＝力能〔Vermögen〕を流入させる

〈あいだ〉の領域を切り拓く「盗む」行為——というラディカルな存在論的テーゼが、現世的時間軸にもとづく発想である。「古きものと新しきものとの調和」の名の下に、時系列的・地政学的権力〔Macht〕関係にはかならない「正典」^{キャナル}「イデオロギー」——そこでは、目に見える（狭義の）〈海賊行為〉のエージェントが、「再調整」によってかえって権力を強化する煽動工作員〔agent provocateur〕だと判明することだろう——に転化した、ということになる。ことほどさように、同じ現象（フェノニテクスト）に向き合っている、〈潜在的な全体性〉^{ヴァーチャル}（ジェノニテクスト）への〈信〉〔foi〕の有無によって、生産される理論には本性上の差異が生じるのである。本備考で扱ったエリオットの「伝統論」において見出された〈異質性〔heterogeneity〕〉が指し示すのは、「T・S・エリオット」という〈テクスト〉のなかで演じられる「空白をめぐる巨人族の戦い」⁽³⁶⁾なのである。

なお、前述のビエール・バイヤール『前もつての剽窃』も、ボルヘス「カフカとその先駆者たち」も、エリオットの「伝統論」に言及している。両者とも、出典を明らかにする適切な注釈をつけている以上、剽窃の罪に問われることはない。むしろ、エリオットの方が、この両者にたいして、恥ずかしげもなく「前もつての剽窃」を行っているのは疑いもないことだ。⁽³⁷⁾

系
テクストは、それがテクストとして現働化するかぎりにおいて、つねに・すでに〈海賊行為〉そのものである。

備考一

その〈海賊〉の名は、〈生〉であろう。

備考二

ここで読者は、「定理」と「系」のあからさまな矛盾に困惑することだろう。(「テキスト」に内部／外部の境界が特定できないことを根拠に「テキストの〈海賊行為〉は存在しない」としていたものが、いまでは「あらゆるテキストが〈海賊行為〉そのものだ」と主張され、また、「外部」は特定できないとされていたものが、「その名は〈生〉であろう」と明言されるのであつてみれば、そのような困惑も無理のないことである。この点にかんしては、「他なる時間」〔潜在的な全体性^{ツァーグマール}〕といった概念(＝別の次元)を導入してすでに十分説明したと信じるのであるが、それにしても「定義二」にある「外部に出自を有する」の解釈(の変容)が腑に落ちない向きがあるのも、十分理解される。ここでは、これ以上くどく説明を重ねる代わりに、ドゥルーズがフーコーに「背後から近づいて、子供をこしらえてや」った結果生まれたテキストから、「外部性」[exteriorité]と外[de dehors]とは区別しなくてはならない(「フーコー」一五九頁)という要請を紹介しておくこととする。「まだひとつの形態[encore une forme]」にすぎない「外部性」にたいして、「外は力[de force]に関わる」——「形態の歴史とは決して一致しない力の生成が存在するのである。この生成は、別の次元で行なわれるからである。どんな外部世界よりも、またどんな外部性の形態よりも、なお遠い、一つの外、そのために限りなく近いものである一つの外⁽³⁸⁾。そして、より近く、より遠いこのような外がなければ、どのようにして、二つの外部性の形態は、たがいに外部にありえようか」(二六〇頁)——「力は力に関わるのだが、それは外から関わるのだ。だから、形態の外部性、つまりそれぞれの形態にとつての外部性と、形態の相互関係にとつての外部性を『説明する』[explique = 變びを開く]」ものは、外なのである」(二二二頁⁽³⁹⁾)。

内部／外部という二分法より「なお遠い」〈外〉は、「別の次元(＝潜在性の次元)」における「力の生成」にかかわるが(垂直的な〈あいだ〉)としてのジェノ⁽⁴⁰⁾＝テキスト)、それは同時に「環境」[milieu]と中間

[entre-deux]——すなわち、水平的な〈となり〉——として「限りなく近い」ところにあり、「外からやってくる力、動揺や、攪乱や、再編成や、突然変異の状態でしか存在することのない様々な力を解き放つ」(二六二頁) 潜在的契機を無数に折り畳んだ [implycare] 「〈海賊行為〉そのもの」として現象する (フェノロテキスト)・・・・と、この「系」は理解されうる。そのうえで、「テキストとして現働化されるかぎりにおいて」という挿入句は、この「〈外〉の力」(≡潜勢力)が、無数の〈襞〉が連れ合い絡み合う [complicatio] 様態 [modus] へと変化する [affectio = modificatio] などによって、その [jewels] 自己を表出〔表現〕する、という個体化のメカニズムを説明するために置かれている(表現の問題)。このような理解によれば、「間テキスト性」とは、畢竟、あらゆる(フェノロ)テキストの本質/原因であるところの「〈外〉の力」を知覚する——「音韻」や「意味」といった属性 [attributum] を通じて、無数に折り畳まれた〈襞〉を開くことによって、知覚する——ための操作概念の謂いであつたと考えられる。「系」は「定理」と矛盾するのではなく、むしろ代補しているのだ。

以上をもつて本試論において必要な説明は尽くされた⁽⁴⁰⁾と信じるが、最後に「付録」として、具体的な(間)テキストを組上りにのせて、そのような〈襞〉をほんの少し開いてみせる、ささやかな試みを行つてみたいと思う。

〈付録〉

「四月はもつとも残酷な月だ」は、T・S・エリオットの長編詩『荒地』の冒頭第一行である——この常套句は、ことに学年歴が四月に始まる本邦においては、なかなかの人氣である。英文学史の知識を多少なりとも持っているディレッタントなら、さらに、「これは、チョーサー『カンタベリー物語』の「総序」冒頭の「本

歌取り」である（ゆえに、英文学史の古典として「記念碑的」なものである）とでもつけ足すだろうか。

しかし、この命題は——常套句を「命題」扱いる野暮をお許しただけならば——ふたつの理由で偽である。ひとつは弱い理由で、もうひとつは強い理由。まず、弱い理由としては、『荒地草稿』においてその詩行はもともと「冒頭」ではなかった、ということにある——なぜ「弱い」のかといえは、『荒地』と『荒地草稿』とは、むしろ別個のテキストであって、一方が他方に虚偽申告を行ういわれはないからである。ともあれ、ニューヨーク公立図書館バーク・コレクション所蔵の『荒地草稿』を見ると、「四月はもつとも残酷な月」の前には“First we had a couple of feelers down at Tom's place.”から始まり“So I got out to see the sunrise, and walked home.”に終わる五五行が（すでにタイプ原稿の形で）置かれており、そこでは夜更けのボストンを徘徊し売春宿へ通う“we”の姿が描かれている。⁽⁴¹⁾ここで（狭義の）「間テキスト性」を云々するのならば、『カントベリー物語』という英文学の大古典よりはむしろ、善良なる同時代読者の意識を逆なでしたジェイムズ・ジョイスの前衛的実験作『進行中の作品』（のちに『エリシーズ』として『荒地』と同年に刊行）の「キルケー」エピソードが引き合いに出されるべきだろう。エズラ・パウンドによる「帝王切開」を経ずに、『荒地草稿』がこのままの形で出版されていたならば、『荒地』の冒頭——もつとも、それならタイトルも『荒地』ではなく『かれはさまざまな声色で警察官のまねをする』だったわけだが——が読者に与える印象が、まったく違ったものになっていたことは間違いない。

強い理由にかんして言えば、『四月はもつとも残酷な月だ』は、T・S・エリオットの長編詩『荒地』の冒頭第一行である」という命題は、明白に偽である。実際に詩集を手にとってみれば、誰にでもわかることである——

April is the cruellest month, breeding

これが、『荒地』の第一行——つまり、*breeding*。まで含めて、「第一行」なのである。むしろ、ここでも、日本語の訳詩を原詩とは別個のテキストと考えれば——当然そのように考えられてしかるべきだ——また話は違ってくるが、ひとまずこのまま話を続けよう。

他動詞 *breed* は、マンジャンブマン (*enjambement* 句跨ぎ) のちぎに目的語を要請する。また、これが詩行である以上、*ing* は脚韻の相棒を (すくなくとも権利上は) 要求することができる。つまり、この「第一行」のおわりに——「四月はもとも残酷な月だ」という常套句の (ととなり) に——この *breeding* という (異質なもの (*heterogeneté*)) がおかれることによつて、ふたつの意味 (統辞論的および音韻論的意味) において、「前もつての剽窃」と似た事態が生じているのである。そして、これこそがまさに常套句と詩行とを区別するもので、詩の詩たるゆえんでもある。

では、このマンジャンブマンと脚韻にしばらくつきあってみよう——

April is the cruellest month, breeding

Lilacs out of the dead land, mixing

Memory and desire, stirring

Dull roots with spring rain.

Winter kept us warm, covering

Earth in forgetful snow, feeding

A little life with dried tubers.

『カンタベリー物語』「総序」の冒頭部分と並べてみよう——

Whan that April, with his shoures soote

The droghte of March hath perced to the roote
And bathed every veyne in swich licour;

Of which vertu engendred is the flour:

『カンタベリー物語』の冒頭で——つまり、少々おおげさな言い方をすれば、英文学史の劈頭で——言祝がれた「四月」、恵みの雨が根っ子〔roote〕までしみわたり、その力能〔vertu〕によって花々が咲きはじめるこの「四月」を「もともと残酷な月」と名指し、生まれざせられることの苦痛と全面化する不能〔impotentia〕を語ったのであれば、たしかに『荒地』の「本歌取り」は、クリステヴァがロートレアモンのパロディにかんして「異和的连接〔alter-ijunction〕⁽⁴⁶⁾」と呼んだものの、もともと効果的な事例のひとつであると言えるだろう。この「本歌取り」の成功により、『荒地』は、その冒頭からすでに「英文学の古典」の地位を確かなものとしている、⁽⁴⁷⁾と評価された。

ハッピヴ、もうひとつ、少々奇妙な冒頭句を紹介しておこう——

April is the queereſt month, breeding

Eaſter lilies out of the fertilizer, mixing

Influenza and hoſanna, ſtringing

Drab roofs with ſpring cleaning,

Winter kept us warm, covering

New England with Gamalalian psychology

Feeding a little coal with broken ſlate.

これは、『荒地草稿』とともにニューヨーク公立図書館バーグ・コレクションに（文字通り）眠っている、「(エ

リオット氏がボストン在住であったならば書かれていたかもしれない「荒地」というタイトルのパロディ詩の冒頭である。作者は、ジャーナリストのエリオット・ポール⁽⁴⁶⁾で、おそらく私的に書かれた戯れ歌であったと思われる。もしも、『荒地草稿』の冒頭がボストンの夜歩きだったと知ったら、きつとエリオット・ポールも驚いたに違いない——ある意味で、すでに書かれているがはまだ読まれていない『荒地草稿』を「前もって剽窃」していたことになる。いずれにせよ、この「古典入り」どころか「お蔵入り」状態の長編詩が、なんらかの奇妙な理由で世に出ることがあったとしても、そこで取りざたされる「間テクスト性」は、『荒地』の露骨なパロディとしてのそれで、それ以外のなものでもないものであつて、まさか『カンタベリー物語』が引き合いに出されることはないだろう。炭鉱ストをおさえこんだハーディング大統領（ミドル・ネームは、六行目に言及されている Gamaliel）とワット・タイラーと面会したリチャード二世（『カンタベリー物語』の時代背景）——そして、二人とも「任期中」に倒れた——を比べてみようなどは、誰も思いつきはしないことだろう。「文学史」という正典化〔canonize〕する権力〔potestas〕は、かような「意味づけ」のネットワーク（「包摂と排除」の構造）によって機能するのである。

この奇妙なパロディ詩を、あと二行だけ引用することをお許し願いたい——

Summer surprised us, coming over the Cape Cod Canal

With a shower of soot; we stopped at the Marliave

つれぬ、まひるふ、『荒地』の "Summer surprised us, coming over the Starbargersee / With a shower of rain; we stopped in the colonnade," の「巧美」なパロディである——*ハンズバ、Cape Cod Canal* を老舗レス トラン Marliave は、きつと、学生時代をボストンで過したエリオットにとつても懐かしい名前であったに違いない。ミュンヘンの「にわか雨〔a shower of rain〕」をボストンの「にわか煤〔a shower of soot〕」に置き換

えたのは、直前の炭鉱への言及とも呼応して、「巧い詩人は盗む」と言ってもよさそうな「本歌取り」である。しかし——

この“a shower of soot”は、『カンタベリー物語』冒頭第一行の“shoures soote”を、それこそ無媒介的に、呼び込んで来ないだろうか——まさに、「間テクスト性」の力能^{II}潜勢力〔*potentia*〕が発動する瞬間である。チヨースーが使っていたミドル・イングリッシュで“soote”は“sweet”の意味であり、意味論的には“soot”とまったく関係がない。だが、音韻論的にはまちがいがなく、互いの名を呼び合っている。ここで、ヴァレリーの有名な詩の定義を思い出してもいいだろう——「詩——音と意味とのあいだの、この引き延ばされた躊躇〔*le poème* — *cette hésitation prolongée entre le son et le sens*〕——」⁽¹⁾で、「音〔*le son*〕」と「意味〔*le sens*〕」とが、やはり、互いの名を呼び合っていることにも、聴き耳をたてておきたい。

躊躇し、それを引き延ばしていくことが、肝要なのだ。『荒地』の冒頭句^{イソキキト}についても、常套句と正典化の権力による「意味」づけを前に躊躇し、潜勢力の奔流を呼び込むかもしれない「音韻」に耳を澄ましてみるのは、どうだろうか．．．*ing*の不格好な連続脚韻に耳を澄ますと、わたしには、E・A・ポー「大鴉」の冒頭近く⁽²⁾の耳障りな“While I nodded, nearly napping, suddenly there came a tapping, / As of some one gently rapping, rapping at my chamber door.” (ll.2-3) が聴こえる——このような指摘は耳にしたことがないし、ポーをヘボ詩人と呼んで憚らなかつたエリオット本人が認めるはずもないが——⁽⁴⁷⁾ロマン・ヤコブソンは、ポーのこの*ing*の連呼を論じる際に、ヴァレリーの「音と意味とのあいだの躊躇」を導き手としている（言語学と詩学）——アガンベンは先ほど引用した「詩の結句」を、ヴァレリーを引用するヤコブソンに言及するところから始めている——そのヤコブソンの引用は、ポリンゲン版の英訳からだが、その版に序文を書いているのはエリオットである——その「序文」においてエリオットは、「よそでも述べたが」と前置きしつつ、

ポーの詩の拙さを貶す——その「よそ」にあたる講演「ポーからヴァレリーへ」(一九四八)において、「ただし音〔*sound*〕を持つ語を選ぶに際しても、ポーは、その語がただしい意味〔*sense*〕を持つかどうかにはまったく注意を払わない」と批判している——その講演でも、エリオットは、ポーがフランスの大詩人たちに決定的な影響を与えたという事実が、英語を母語とする詩の愛読者たちにはにわかに理解しがたいだろうと言っているが、クリステヴァに言わせれば「ポー＝ポードレール＝マラルメを結ぶ詩の実践は、今日多くの例が見られるこの異和的连接〔*alter-junction*〕のもっとも印象的な例である」(『セメイオチケ 一』二四九頁)——マラルメによる「大鴉」のフランス語訳においては、*ぎ*(*ch*)ない *ing* の連続韻が失われ、代わりに *fois - fable - fatigue - fit - frappant - frappant* のなめらかな頭韻の流れができていく——冒頭イニキエトの "Once upon a midnight dreary" はマラルメによつて "UNE fois, par un minuit lugubre" と(翻訳)されているが、ポーの原文にはないコンマを打つことによつて切斷〔*caesura*〕を持ち込み、*fois*⁽⁴⁹⁾ という語が切り出されている——そして、この切り出された「音」は、本試論の鍵語である〈*foi*〉の名を呼び出さずにはおかない(本試論を「前もって剽窃」するマラルメの訳詩)……

こうやつて、自由連想とも妄想とも見まごう(横滑り)⁽⁵⁰⁾は、わたし(という記憶≡テキスト)において、延々と続けていくことが可能である。なぜなら、(フェノ＝)テクストには「潜在的無限性」としてのジェノ＝テクストが無数の襲として折り畳まれているという、〈潜在的な全体性〉への〈信〉〔*foi*〕が、わたしにはあるからだ。常套句や正典化の権力による意味づけ≡固定化を認めることに躊躇し、その躊躇を引き延ばすことさえできれば—— "I would prefer not to" ——そして、あとは適切な装置さえあれば——押韻は、そのもつとも有効な装置のひとつにちがいない——この無数の襲をひとつひとつ開いていくことができるはずだ。⁽⁵¹⁾

「四月はもつとも残酷な月だ」という常套句の（ととなり）にある「breeding」を切り捨てるのではなく、「むしろ愛をもって」⁽⁵²⁾それに接し（ふれ／ふれられ）、そこに開かれる（あいだ）＝「未分化の領域」——そこには〈生〉という名の海賊が顔をのぞかせている——における無限の繁殖「breeding」⁽⁵³⁾＝生成の流れを言祝ぐこと——〈生〉の流れに〈コト（言・事）〉が立ち、かつ消えかつ結ぶさまを祝⁺くこと——これこそが、「海賊行為」としてのテキスト」理論の（約束）⁽⁵⁴⁾なのである。

(1) この「定義」は、あくまで本試論における考察の用に供するために案出したものであり、このテキストを越えて「beyond this text」十全性を主張するものではないし、その必要もない——スピノザがド・フリースの質問に答えて言ったように、「定義は十分理解され得るものでさえあればよいのであつて公理のように真理に関しなくともよい」(『スピノザ往復書簡集』五〇頁)と考えるからである(そもそも、テキスト一般の十全な定義がなされたとしたならば、その定義自体は〈テキストの外部〉ということにならないのだろうか？他方、後期ド・マンの擧に倣つて、その「定義不可能性」によつてテキストを「定義」する方向性も考えられるが(『読むことのアレゴリー』三五〇頁)、本試論の目的は、ド・マンのようにテキストがどのように作動するかを分析する——文法(機械)と比喩(意味)のアポリアが不断の自己「脱構築を上演」行為遂行するさまを観察する——ことではなく、(本定義の「説明」に記したように)「テキストがある」ということとはどういうことか」という(問い)——テキストの存在論——に取り組むことにあるため、あくまで「可能」でプラグマティックな定義によつて始めるのが得策と考えた。

では、この案出された「定義」が何の用に供するののかというと、本試論における考察の端緒となる「定理」を証明するために必要な「公理」(テキストの外部)なるものは、ない」を引き出すことにある。そして、この「公理」がジャック・デリダからのあからさまな剽窃「il n'y a pas de hors-texte」である以上、「定義」にも同様の態度で臨むことが得策と考え、デリダのさまざまなテキストから引用の織物を編むこととした次第である。以下、参考までに、筆者がとくに参考にした箇所を引用することにより剽窃の料を免れたいと思う(本試論の文脈に合わせるため翻訳に多少の

変更を加えたケースがあることを、あらかじめ断っておく——

「それはもう一度別の仕方、テクストの外というものはないということを喚起しています。このことが言おうとしているのは、人々がそれを装ったり、しばしば素朴にそう信じて私を非難したりするように、あらゆる参照項が書物のうちに宙吊りにされ否定され閉じ込められるということではありません。そうではなく、いかなる参照項も、いかなる現実も差延的な痕跡の構造を有しており、ひとは解釈的な経験のなかでしかこうした現実的なものに関係しえないということなのです」〔『有限責任会社』 三一—八頁〕——「そこで起こったことは、それが起こったとしたならば、ある種の「はみ出し」〔*overrun / débordement* (超過)]であり、それによって「テクスト」と呼びならわされていたものが持つ〕あらゆる境界や分割は無化され、われわれは「テクスト」(いまだにわたしが「テクスト」と呼ぶところのもの)の一般的に受け入れられた支配的な概念を、戦略的な理由から、部分的に拡大するよう強いられる——こうして「テクスト」は、もはや書かれたものの閉じられた全体、書物やその余白に閉じこめられた内容といったものではなく、差延のネットワーク、すなわち、それ自身以外のなものか(他なる差延の痕跡)を絶え間なく指示〔*Index*〕する痕跡の織物となるのだ」〔*Living On*, 八三—四頁、拙訳〕——「私がテクストと呼んでいるものは、そのような言説の諸境界を『実践的に』書きこみ、そこからはみ出すようなものでもあるのです。そのような言説とその次元に属することども(本質、意味、真理、意義作用、意識、観念性、等々)がはみ出される、〔*débordés* (超過される)〕ところではどこにおいても(つまり、どんなところでもそうだといいことですが)、そういった一般的なテクストがある、〔*il y a*〕のです。言いかえれば、そのような言説とその次元に属することどもの審級が、ある連鎖のなかで標記〔*marque*〕の位置に置きなおされるところでは、どこにおいても、ということですが」〔『ポジシオン』 八八頁〕——「(これは他の著作でずいぶんと紙幅を費やして述べたことではありませんが)テクストをほとんど境界のない、いずれにしても現前したり知覚したりできる境界のない、つまりあるといえるようないかなる限界線のないものにまで一般化することによって、テクストの概念を再定義することが必要であるとわたしが考えたのは、まさに戦略的な理由からなのです。そのために、『テクストを越えて』〔*beyond the text*〕は、なにもものもないのです。そのために、南アフリカもアバルト、ヘイトも、ちやうどあなた方わたしと同じように、この一般的テクストの部分ということになるのですが、だからといって、この一般的テクストが本を読むように読まれることができるということではありません。そのために、テクストはつねに

諸力のせめぎ合う場——異他的で差延的で開かれていて、などなど、といった場——なのです。そのために、脱構築的読みやエクリチュールは、図書館の本や諸言説や概念的・意味論的内容などといったものみにかかわるのではなく「But, beyond...」(一六七～八頁、拙訳)——「無意識のテキストはすでに純粹な痕跡、差異によって織り込まれている。ここでは意味と力が結合しており、これは、つねに、すでに、転記であるような複数の古文書によって構成された、どこにも現前しないテキストである」(『エクリチュールと差異』四二七～八頁)——「もし襷がないとすれば、あるいは、襷が、標記、余白ないし辺境(闕、境界、限界)としてのみずから以外の限界を、どこかにもつということになれば、テキストなどありはしないだろう。ところが、テキストなるものが文字通りには「厳密には」実在しないとしても、おそらく一つのテキストがある。一つの進行中の「辺境における」テキストが。それと付き合わなければならぬ」(『散種』四三二頁)、ほか多数の箇所を参照のこと。

ところで、スピノザは、あるべき「定義」の諸条件について語っているが(『知性改善論』九五～九八段落)、それによれば、定義が事物のある特性〔*propria*〕を明らかにするだけでは不十分で(たとえば、「中心から円周へ引かれた諸線の相等的しい図形」という円の定義)、それは「最も近い原因〔*causa proximitate*〕を含まなければならない(たとえば、「一端が固定し他端が運動する任意の線によって描かれた図形」という円の定義)。ここには、エウクレイデスを批判するホッブスの「定義」論、すなわち「特性」ではなく「生成〔*generatio*〕」による事物の定義という思考の影響が指摘されている(De Div. 参照)。この観点からするならば、クリステヴァによる「テキスト」定義——バルトも有名な世界百科事典(一九七三)の項目で、そのまま引用したもの——が、より「あるべき定義」に近いと言えるであろう——「テキストとは、端的な情報を目指す伝達的な言葉(パロール)、先行の、もしくは共時的な、多様な言葉類型と関連づけることによって、言語の秩序を配分し直す超—言語的装置〔言語学を横断し超出する装置 *appareil translinguistique*]」である、と定義しておく。したがって、テキストとは一種の生産性なのである(『テキストとしての小説』一八頁)。このあと本文で論じるように、クリステヴァの「間テキスト性」理論とは、まさに(ホッブスのな)「生成による定義」の条件とみなすこともでき、その意味で本試論の筋道は、デリダから借用した初発の「定義」から、クリステヴァの(間)テキスト理論にもとづく「生成による定義」へと乗り換える行程である、とみなすことができるかもしれない。(いうまでもないことだが、デリダからの偏った「借用」によるパッチワークである「定義」をもって、デリダ本人の

思想を代表させる気は毛頭ない。むしろ、フランチェスコ・ヴィターレの最近の仕事(「テキストと生物」)に代表されるように、デリダのテキスト論を(生命)論に接続する研究が目下進んでおり、これはまさに本試論を「予備的考察」として筆者が企図する後述の「生態学的文学理論」と軌を一にするものとなるであろうと、大いに期待している。)

(2) この定式はハイデガーから借用したものである——「けれども、存在の真理が、思索にとつて、思索されるのに——値するものとなったあかつきには、言葉の本質への省察も、これまでとは別の位階に達せざるをえないであろう。言葉への省察は、もはや、たんなる言語哲学であることはできないであろう。ひとえにそうであるからこそ、『存在と時間』(第二四節)は、言葉の本質次元への指摘を含み、また、いったいいかなる存在の仕方において言葉は言葉としてその(2)が存在するのかという[in welcher Weise des Seins denn die Sprache als Sprache jeweils ist]、単純な問いに触れているのである」(『ヒューマニズム』に「ついで」二七頁)。

(3) そのためキケロは、海賊を「万民共通の敵[communis hostis omnium]」と定義した。このキケロの定義からはじめ「海賊的パラダイム」を系譜学的にたどりなおすことによりその現代的意義を考察した、ダニエル・ヘラーローゼン(S. *The Enemy of All: Piracy and the Law of Nations* (2009))を参照のこと。

(4) この「未分化の領域」にかんする記述は、ジョルジュ・アガンベンによる「例外状態」のそれを借用したものである——「実際には、例外状態は法秩序の外部でも内部でもないのであって、その定義の問題は、まさにひとつの罅[una soglia]にかかわっているのである。言いかえれば、内部と外部が互いに排除しあうのではなく、互いに互いを決定しえないような未分化の領域[una zona di indifferenza]にかかわっているのである」(『例外状態』五〇頁)。

アガンベンは、『例外状態』にかんするこの研究を始めるにあたって、「公法と政治的事実とのあいだ、また法秩序と生[la vita]とのあいだにある、この無主の地[terra di nessuno]こそ、今回の探究が調べようとする対象である」(八頁)と述べている。アガンベンの響に倣って言えば、本試論は、「テキストと生との(あいだ)」にある「この無主の地」を探索する企図——それを筆者は「生態学的文学理論」と呼ぶことを提案したいのだが——の端緒を開くための予備的考察である。

(5) 「間テキスト性」の問題を本格的に扱った、日本語で読める——かならずしも日本語に限る必要はないが——モノグラフに、土田知則『間テキスト性の戦略』がある。筆者が本書の存在を知ったのは本試論を脱稿した後であったため、

その議論を本文に取り込むことができなかつた不始末に己の不明を恥じるばかりであるが、それが「間テクスト性」をめぐる思索の方向性を多くの点で本試論と共有する——その意味では「前もつての剽窃」ともいえる——一方で、微妙な（しかし根本的な）差異を有するものであるため、本書をめぐる注釈をこの段階で加えておくことは、本試論の筆者にとつては総括として、読者にとつては梗概として、有効であると考えられる。

「間テクスト性」という考え方は、比較研究、影響研究、実証研究などに与する概念装置であるという誤解を生んだが、実はまったくそうではない。むしろそうした研究方法に疑問を突きつけるものとして登場してきたのである（四九頁）という基本的認識は本試論とまったく同一のものであり、また、クリステヴァ、バルト、デリダ、ドゥルーズといった参照枠が共通するのはある程度の必然性があるにせよ、T・S・エリオットの「伝統論」を主題的に扱う点でも興味深い一致が見られる。（さらに言えば、「できることなら、全体がすべて引用だけからなるような書物を書きたいと思った」（二四四頁）という「あとがき」冒頭のベンヤミンの独白に見られるある種の倒錯したテクストの欲望も、本試論をすべて脚注からなるテクストにしたかつた筆者の欲望と、どこか通底するところがあるように思われる。）このように基本的な認識・枠組をほぼ全面的に共有しているにもかかわらず、そこから引き出される帰結・焦点のあて方に少なからぬ差異があるという事実を考察することによって、両者が抱く根本的な〈問い〉が明るみに出されるように思われる。

すぐれてド・マン的な身振りによつて「間テクスト性」を（脱構築的）読み）の問題に接続する土田の議論には、おもに仏・米における文学理論の諸成果を自由に横断しながら、究極的には（読む）行為を（根源的）アナキックな）「自由」の実践として称揚するという強い意志を感じとることができる。実際、本書においては、「間テクスト性」理論の骨頂をその「水平的」⇨「換喩的」モメントに見出し、その批評的戦略の使命は「垂直的」で「権力的・位階的な思考装置」を脱構築することにあるということが、くりかえし強調される。「間テクスト性」理論をユダヤ⇨ラビ的（読み）の実践へと接続する刺激的な議論において（第四章）その「宗教的アナキキー」が強調されるのも、つづく第五章においてドゥルーズ⇨ガタリの「リズム」が召喚されるのも、土田が構想する「間テクスト性の戦略」の根底に「いわばテクスト論的アナキキーとでも称すべき性質のもの」（二七九―一八〇頁）が厳然としてあることを示している——そして、この点において、本試論の筆者は深い共感を抱いているということをまず表明しておきたい。

そのうえで、しかし、本試論はふたたび「垂直線」を導入する——ただし、これが、「間テクスト性」理論の「水平的」換喩的」モメントが脱構築した「権力的・位階的」な「垂直」とは本性上の差異を有するものであることは、いうまでもない。いわば、権力的 (*potestas*) (垂直) を脱構築しつくした内在平面に(痕跡として) 浮かび上がる、潜勢的 (*potentia*) な「垂直」への跳躍——「潜在的な全体性」との直接——を試みる、ということになるだろうか。(本試論の議論で使用されるタームを先取りして言えば、それは、(顕在的な) 権力＝位階制としてある「垂直」を拒絶する「水平的な(となり)」に折り畳まれていく(潜勢的な) 無数の襞のうちに「垂直的な(あいだ)」を直観する態度であるともいえる。) その際に焦点化されるのが「ジェノロテクスト」であるが、そのタームが土田の議論においてまったく登場しないのは、両者の(問い)の根源的差異の徴候であるとみてさしつかえないだろう。同様の差異は、それぞれのエリオット「伝統論」の読みにも表れている。土田は、その「伝統論」をバルトの「作者の死」に接続しつつ、一般的には「垂直的なヒエラルキー階梯」と見なされがちなものを「水平的、脱階梯的な関係への移行」(二五三頁)の一面を持つものとして評価する——ちなみに筆者自身も、同様の読みかえの可能性を、「MetaOikos」結構(八紘一字)のうち潜在する「mata-oikos 的」変容のモメントとして、かつて論じたことがある ([Metokios たちの帝国])。それに対して本試論は、エリオットの「伝統」をベルクソンの「(純粹)記憶」と接続し、そこに「存在論への飛躍」の可能性を読みこむことを試みる。土田の提唱する「インター・リーディング」が「影響関係、つまりはクロノロジカルな時間観念を徹底的に脱構築すること」(一一九頁)と規定され、その「反—歴史」的モメントに「間テクスト性の戦略」の批評的エッジが見出されているとするならば、本試論はそのエッジを全面的に受け入れつつもそれを超えて、歴史／反—歴史の対立とは「別の次元」としてのベルクソンの「持続」の相の下に文学理論を構想する——フェリックス・ガタリの言う「エコゾフィー」、すなわち「潜在的なもののエコロジの総体」(『エコゾフィーとは何か』五九頁)を(問う)ことができるテクスト理論を構築する——ための予備的考察であり、これは前注に示した「テクストと生との(あいだ)」という視座にも通じるものであると考えている。(その関連で言えば、別の箇所において土田は、「反—宗教」「反—神学」としての「間テクスト性の戦略」を語っているが、ここでもまた、その戦略の意義に全面的に同意しつつもそれを超えて(宗教的なるもの [the religious]) の潜勢力を導入することが、この来たるべき文学理論の課題となるであろう。)

- なお、土田はその後の著作（『ポール・ド・マン 言語の不可能性、倫理の可能性』において、ド・マン晩年の思想に寄り添うかたちで、「現象性」と根源的に対立しつつ不即不離の関係にある「文字の」物質性」といった問題へと思索を展開しており、「テキスト論的アナキー」の〈あなた〉を模索しているようにも見うけられる。これは、(フェノ＝) テクストのうちに絶えずジェノ＝テキスト(の痕跡)を見る本試論と、その思索の方向性を共有していると言えるであろう。ただ、ド・マンに随って「不可能性」の否定神学的態度をとる土田に対して、こちらはあくまで「潜勢力＝潜在性の次元」という《力》の充溢を(信)じ(信)じている点で、やはり、そこには根源的差異があるものと考えられる。この点で興味深いのはド・マンの「パーフィギュラな次元」という難解な表現の解釈で、土田はこの「パラ」を「・・・に反する」もしくは「・・・から防ぐ」と解釈しデリダ＝ド・マンが「不可能の可能性」を探り続ける戦略を読みこむ(二三三～四頁)が、本試論の筆者ならば「パラ」＝〈となり〉に開かれる「潜在性の次元」を問う契機を見いだすであろう。(ここで筆者の念頭にあるのは、最晩年のメルロ＝ポンティが準備していた「制度化」の議論で、偶然的にふと生じた「偏差」が予想外の「次元の開け」を生むという構図——「記号のふちで生まれ出でることの意味、部分における全体の切迫」(間接的言語と沈黙の声)六〇頁。ただし、邦訳では「切迫 [imminence]」を「内在 [immanence]」と取り違えているので訂正した)——である。メルロ＝ポンティの「制度化」については、「次元の開け」としての制度化」ほか廣瀬浩司による一連の論考を参照のこと)。
- (6) 「相互テキスト性(間テキスト性)」という用語が往々にして、あるテキストの『典拠の研究』というありきたりの意味に受け取られてきたことを考えると、われわれはそれに替えて転位＝措定移行 [transposition] という用語を選ぶ(クリステヴァ『詩的言語の革命』五六頁)。
- (7) ハロルド・ブルームの「影響の不安」(一九七三)と、クリステヴァの「間テキスト性」との混同を批判した初期のものに、Jonathan Culler, "Presupposition and Intertextuality" (1976) (*The Pursuit of Signs* 所収) がある。
- (8) これをもって「非歴史的＝非政治的」と非難するのは、あまりに拙速であろう。むしろ、クリステヴァ自身も言うように、「先行するあるいは共にする時代の文学の資料全体 [corpus]」を読みながら書いてゆくというそのやり方によって、作者は歴史のなかに生きており、社会はテキストのなかに書きこまれる(『セメイオチケ 一』一一七頁)のである。逆に、「影響の不安」のようにオイディプス三角形といった(構造)に回収される構図が歴史・社会的コンテクス

トを捨象するのにつながることは、エドワード・サイードの指摘する通りである——「わたしが主張したいのは、この論争、もしくはブルームがあればどの洞察と明敏さをもって論じるインターテクスチュアリティは、ロマン派詩人を包摂しまた可能にしている、文化の物質的生産媒体をすべて軽んじているということです」(『権力、政治、文化(上)』四四頁)。

俗流の「政治的批評」を旗印にするテクスト読解にしばしば見られるのは、ある作品が歴史的・政治的情况を代理Ⅱ表象する——顛覆的であれ、反動的であれ——さまを暴露してこと足れりとする(『隠喩的』態度だが、それもクリスヴァアに言わせれば、「エクリチュール〔書くこと〕』という生産性に眼を閉ざして、作品という結果のみを受け入れている」(『テクストといわれる生産性』『セメイオチケ 二二一六六頁〕点において、「作者の意図」を探す旧態依然とした態度と大差はない。社会／作品の二分法にもとづく(表象主義)と訣別し、「テクストといわれる生産性」の(表現主義)(『ドウルーズ』『スピノザと表現の問題』参照)への飛躍を標榜する文学理論は、ドウルーズⅡガタリ『アンチ・オイディプス』における社会／欲望の生産(の無媒介的同一性(ヴィヴェイロス・デ・カストロ参照))にかんする以下の記述のうちに、ひとつのモデルを見出すことだろう——「一方に現実の社会的生産、他方に幻想の欲望的生产があるわけではない。これら二つの生産の間に、注入や投影といった二次的關係が確立されるわけではない。もしそうなら、あたかも社会的実践が内面化された心的実践に重なり、あるいはまた心的実践が社会的システムに投影されるだけで、これらたがいに決して侵食しあわないかのようである。(中略) 本当は、社会的生産は規定された諸条件においては、もっぱら欲望的生産そのものなのである。社会的領野は直接的に欲望に横断され、それは歴史的に規定された欲望の産物であり、リビドーは、生産力と生産關係を備給するために、いかなる媒介も、いかなる昇華も、いかなる心理的操作も、いかなる変形も必要としない、と私たちは主張する」(『アンチ・オイディプス』(上)、六一―六二頁)。同様にクリスヴァアが「生産」の場面にこだわるのは、言うまでもなく、すぐれて唯物論的な関心によるものであり、そうであるからこそ、以下のようなさりげない譬えも現れるのだ——「テクスト生産性は文学の(テクストの)内的尺度であるが、文学(テクスト)そのものではない。ちょうど、それぞれの労働が価値の内的尺度であっても、価値そのものではないように」(『セメイオチケ 二二二七頁)。

(9) (あいだ)の生命論的解釈にかんして、筆者は、近くは木村敏の一連の著作に、遠くはスピノザの「共通概念

〔notiones communes〕論に、多くを負っている。たとえば、以下のふたつの引用を参考にされたい——

個人の「生」Lebenということ、その人の出生から死までのあいだの人生と考えるにせよ、その個体の受精ないし生殖から死までのあいだの生命と考えるにせよ、それはいずれにしても時間軸上の延長に沿った「水平」あるいは「横」の「あいだ」の出来事である。個々の個人あるいは個体は、それぞれが主観／主体として、自己と他者の人生あるいは生命どうしのあいだで、水平あるいは横の間主観的・相互主体的な出会いを生きている。／これに対して、個人がその人生や生存の各瞬間に自己自身の生を生きている局面においては、この生はつねに個人以前の「生命の根拠」との、つまり〈生〉そのものとの「根拠関係」に根ざして、個人の存在の絶対的外部から絶えず流れ込んでいる〈生〉の「はたらき」によって生かされつづけている。そしてその個人の身体が〈生〉を受容する機能を失うと、〈生〉は〈死〉と名を換えて、個人はその生命を失い、その人生を閉じることになる。これを時間軸上の各瞬間における「垂直」あるいは「縦」の構造と見なすとすれば、ここでもやはり、「水平」あるいは「横」の「あいだ」の出来事である生命が、「垂直」あるいは「縦」の「あいだ」の関係によって担われていることになる。

（木村敏『あいだと生命』二〇四～五頁）

私がここで存在というのは持続のことではない。すなわち、抽象的に考えられる限りの存在、いわば一種の量として考えられる限りの存在のことではない。なぜなら私は、存在の本性そのものについて——神の本性の永遠なる必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で生ずる（第一部定理一六を見よ）がゆえに個物（res singulares）に付与される存在の本性そのものについて語っているのだから。つまり私は、神の中に存する限りにおける個物の存在そのものについて語っているのである。というのは、おのおのの個物は他の個物から一定の仕方で存在するよううに決定されているとはいえ、各個物が存在に固執する力はやはり神の本性の永遠なる必然性から生ずるからである。

（スピノザ『エチカ』第二部定理四五備考）

なお、「垂直」の比喩が「超越」の契機を持ちこみかねない（注54を参照）のにたいして、スピノザが「神に係する〔referre〕」と言ふ際には「内在性」が徹底されていることについては、筆者の博士論文 *Reading T. S. Eliot Reading Spinoza* (Cornell University, 2013) を参照された。

(10) ボール・リクール『記憶・歴史・忘却』におけるベルクソンの「分析力」を評価する箇所を参照——「分析を始動さ

- せるのに、まだイマージュ化されない「純粹回想」のようなものが存在することを認めよう」(九四頁)。
- (11) 「本当のところはどうかというと、記憶は現在から過去への退行のうちに存しているのではまったくなく、逆に、過去から現在への進展のうちに存しているのだ。過去のなかにわれわれはただちに身を置く」(『物質と記憶』三四一頁)。
- (12) 「筆者にとっては、だから詩的言語は潜在的無限性、[infinite potentielle]として提示される(この語はヒルベルトの概念構成の基本用語としてもっている意味で用いられている)。すなわち、(詩的言語という)無限集合は実現される可能性の集合とみなされており、この可能性のひとつひとは別個に実現されるが、その可能性のすべてが一度に実現されるのではない、ということである。／記号論は記号論として、表象しえないけれども現実にある無限、[infinite réelle]としての詩的言語という概念を自らの推論過程に導入することができるであろう」(『パラグラムの記号学のために』『セメイオチケ』一―一六頁)。ここでの主語は「詩的言語」であるが、それが「無限のシニフィアン」[e significant infini]である「ジェノノテキスト」と等価——おなじ濃度 [puissance = 潜勢力・力能] の無限——であり、「パラグラム」「間テクスト性」といった概念とも通底するものであることは、『セメイオチケ』全体を精読した読者にとって明らかであろう。
- (13) 「見えないものは対象であることなしにそこにあるのであり、それは存在的仮面 [masque optique] なしの純粹な超越なのである。そして、『見えるもの』そのものもまた、結局のところ、ほかならぬ或る不在の核を中心に動いているのである」(『見えるものと見えないもの』三三四頁)。これは、一九六〇年一月の日付がある「研究ノート」の一節だが、同じ月の「見えないもの、否定的なもの、垂直の〈存在〉」と題された断片には、以下のようにくだりがある——「見えないもの」の欠如が世界的本質的契機になっている(それは見えるものの「背後」にあり、切迫したないし卓越した可視性 [visibilité imminente ou éminente] なのであり、それは $\text{Kraus} \sim \text{Nichturpräsentierbar}$ [根源的に現前しえないもの] として、他の次元として [comme autre dimension])、Urpresentiert [根源的に現前] しているのである」(三三二頁)。この一節には、本試論を書かした(直観)のすべてが書きこまれている、と筆者には思われる。
- (14) たとえば、〈潜在的なもの〉の〈十全な実在性〉の留保なき肯定という重大な存在論的命題をドゥルーズが開陳する、以下の箇所を参照——「潜在的なものは、実在的なものには対立せず、ただアクチュアルなものに対立するだけである。

潜在的なもの、潜在的なものであるかぎりにおいて、或る十全な実在性を保持しているのである。潜在的なものについて、まさにブルーストが共鳴の諸状態について述定していたのと同じことを述定しなければならない。すなわち、「実在的ではあるがアクチュアルではなく、観念的ではあるが抽象的ではない」ということ、そして、象徴的ではあるが虚構ではないということ」（『差異と反復』(下) 一一二頁）。

引用元は、『失われた時を求めて』の最終巻『見出された時』の中盤であるが、そこにおいてブルーストは、「意志的記憶」と対置するかたちで、「時間の秩序から解放されたある瞬間」に「真の自我」が「目ざめ、生気をおび [s'éveille, s'anime]」せよまを考察している——「意志でもって築きあげられる未来とは、意志が、現在と過去との断片から築きあげられる未来で、おまけに意志は、そんな場合、現在と過去とのなかから、自分できめてかかった実用的な目的、人間の偏狭な目的にかなうものだけにしか保存しないで、現在と過去とのなかの現実性を骨ぬきにしてしまうのである。ところが、すでにきいたり、かつて呼吸したりした、ある音、ある匂が、現在と過去との同時のなかで、すなわち現時ではなくて現実的であり [reais sans être actuels]、抽象的ではなくて観念的である二者の同時のなかで、ふたたびきかれ、ふたたび呼吸されると、たちまちにして、事物の不変なエッセンス、ふだんはかくされているエッセンスが、おのずから放出され、われわれの真の自我が——ときには長らく死んでいたように思われていたけれども、すっかり死んでいたわけではなかった真の自我が——もたらされた天上の糧を受けて、目ざめ、生気をおびてくるのだ。時間の秩序から解放されたある瞬間が、時間の秩序から解放された人間をわれわれのなかに再創造して、その瞬間を感じうるようにしたので。それで、この人間は、マドレーヌの単なる味にあのようなよるこびの理由が論理的にふくまれているとは思われなくても、自分のよるこびに確信をもつ [confiant]、ということがわれわれにうなずかれるし、「死」という言葉はこの人間に意味をなさない、ということもうなずかれる。時間の外に存在する人間だから、未来について何をおそれることがありえよう?」（『ブルースト全集 一〇』二七〇頁）。

なお、ブルーストの翻訳者でもあったヴァルター・ベンヤミンは、論文「ボードレルにおけるいくつかのモティーフについて」（『ベンヤミン・コレクション 一』所収）の冒頭で、「(真の) 経験を獲得しようする「一連の試み」のなかでも「ひととき高くそびえている記念碑的業績」としてベルクソンの『物質と記憶』を挙げ、その「経験の理論を実地に検証した」文学者としてブルーストを召喚している。ここでベンヤミンが、ベルクソンの「純粹記憶 [mémoire

pure)』とブルーストの「無意志的記憶 (mémoire involontaire)』とを等号で結んでいることは、本試論に貴重な補助線を提供してきているように思われる。

- (15) 『定立の侵犯 (Transgressions)』はいずれも、意味作用を維持する限りどうしても維持してゆかねばならない真／偽の境界を踏み越えることになる。そして、この境界は、ル・サンボリックのなかへのル・セミオティックの流入 (afflux)』によって取り返しつかないほどに揺さぶられるのだ(「ル・サンボリックによる」)切断のあとに(「をもとにして」)再帰的に産出されるル・セミオティックは、ル・サンボリックにおける欲動の機能性の「第二の」回帰として、シンボル秩序に導入される否定性として、シンボル秩序の侵犯 (transgression)』として、表象されなければならない。この侵犯は、定立相 (成立) のあとから否定性を産出する (不法) 侵入 (infraction)』として現れる(『詩的言語の革命』五四、六七頁、翻訳は適宜変更した)。「この多ロゴスの《私》(ce je polylogue)』はある先行するもの (avant)』つまり、論理に先行するもの、言語に先行するもの、存在に先行するものについて語るからである。無意識ですらないひとつの先行するもの、まったく《無意識に先行する》ひとつの《先行するもの》——それは衝撃であり、噴出であり、死である。衝突、そして——音の停滞、次いで——《表象》、《他者》、《言語》、《私》、《言》……の異質性 (hétérogénéité)』、それから——衝撃・噴出・死の突入 (irruption)』(『ポリログ』一七六―七頁、翻訳は適宜変更した)。

- (16) この〈読み〉の技法を定式化した——スピノザ・マルクスに淵源する〈読み〉の技法にラカンの用語を当てはめた——のが、アルチュセール学派による「徴候的読解」であるが、そこでも同様に「二つのテクストの存在」が前提とされており、顕在的テクストとは「別のテクスト」が「必然的不在 (une absence nécessaire)』のかたちで現前しており、しかし徴候の資格で、最初のテクストによってそれ自身には見えないものとして生産された不在の形で現前している(『資本論を読む 上』四九―五〇頁)とされる。本邦でもほぼ同時期(一九六九年)に、廣松渉が「フェノメノンの本源的な二肢的構造」として同様の認識に到達している——「フェノメノンは、即自的に、その都度すでに、単なる『感性的』所与以上の或るものとして現れる。(中略) このイデアールな *etwas* とフェノメノンにおける『所与』とは、空間的に離れ離れに存在するわけではなく、『所与』が *etwas* Anders と、意識される場合に、——すなわち、後者が前者として現れる場合——イデアールな *etwas* が、レアルな『所与』において、いわば肉化 inkarnieren して現れる」

〔世界の共同主観的存在構造〕三八、四三頁〕。

これが、クリステヴァがソシユール・スタロバンスキーから援用する「パラグラム [paragram]」の構造と同形的であることについてはもはや贅言を要しないであろうが、ここで、「間テキスト性」の理論的展開の一翼を担ったミカエル・リファテールが（同じくソシユールのアナグラム研究ノートに現れる用語から）展開した概念である「ハイポグラム [hypogram]」との関係については、若干注釈しておく必要はあるだろう。リファテール自身は、「パラグラムよりもハイポグラムの方が用語として適当」であるとして差異を強調しているが（『詩の記号論』一二七頁、注〔16〕）、リファテールにとっては個別テキスト解釈の用に供する操作概念であった「ハイポグラム」を理論的に深化させようとしたポール・ド・マンに言わせれば、「パラグラムは間テキストを通して起こるハイポグラムの置き換えの過程のことのようにも思われるが、テキストはまさにこの置き換えによって構成されるのであるから、ハイポグラムとパラグラムの区別は決定的な問題ではないとも言える」（『理論への抵抗』一四四頁、注〔11〕）ということになる（なお、ド・マン自身がこの理論をボードレール読解に応用したのが、『Anthropomorphism and Trope in Lyric』である）。しかし、本試論にとってより重要なのは、クリステヴァ自身による（個別の用語法を離れた）リファテールとの本質的な差異にかんする以下の証言であろう——「わたしは、ミカエル・リファテールとは違って、記号的なるもの [the semiotic] を、あらゆる指定や前提に先立つ〈欲動 [drive]〉の無意識的レベルに位置づけるが、かれはというと、意図 [志向] 的な〈迂回〉やそれ自身の鍵を含む〈なぞなぞ〉の連鎖のうちにそれを埋めこもうとする。かれは〈間テキスト性〉をテキストに登記された主体の意図 [志向] 的レベルに位置づけたが、わたしはといえば、志向性や真正性が自発的に放棄される結果主体が意味的部分的喪失を被るような場としての「記号論的コーラ」を開陳する方へと傾いていったのだ」（『Vous Deux』九頁、拙訳）。おなじく「二つのテキストの存在 [本源的な二肢的構造]」をみているリファテールとクリステヴァであるが、前者があくまでテキストの〈秘密を暴く鍵〉として「別のテキスト」の存在を静的／静寂主義的に捉えているのたいして、後者はあくまでも動的／革命論的に「欲動」の次元——〈生〉の次元——に定位する。これこそまさに、リファテールの「詩の記号論」とクリステヴァの「詩的言語の革命」とを隔絶する「存在論的飛躍」である。

(17) デイヴィッド・ロッジ『小さな世界——アカデミック・ロマンス』の一場面。

(18) ヘルクソン『思想と動くもの』(緒論・第一部)における以下の記述が、バイヤールの着想と著しく似通っていることは、もちろん偶然ではない——「われわれが今日、十九世紀のロマンティズムをすでにクラシック作家のうちにあったロマンティックなところに結びつけるのは一向に差しつかえがないが、クラシシズムのロマンティックな面が取り出されたのは、いったん現われたロマンティズムの逆行的効果 [effet retroactif] によるのである。ルソー、シャトープリアン、ヴィニー、ヴェクトール・ユゴーのような人がいなかったとすれば、昔のクラシック作家のうちにロマンティズムの作風が認められないばかりでなく、そういうものは実際なかつたわけである。というのは、クラシック作家のロマンティズムが事象化されるのは、それらの人の作品のなかからある面を切りぬくこと [decoupage] によるので、その切りぬきの独特な形が、ロマンティズムの出現以前にクラシックの文学に実在しなかつたことは、通りすぎる雲のなかに芸術家とその空想力を恣にして形の定まらない塊を整えながら認める面白いデッサンが、雲のなかに実在しないようなものである。この雲に対する芸術家のデッサンのように、ロマンティズムはクラシシズムに対して逆行的にはたらかせた。それは逆行的に自分自身の形状を過去のうちに創造し、先行者たちによって自分自身を説明したのである」(三〇～三二頁)。

(19) 「書くこと―読むこと、バラグラマチックなエクリチュールは、攻撃を、全体的参加をめざす渴望であらう(「剽窃は必要だ」——ロートレアモン)。(パラグラムの記号学のために)『セメイオチケ 一』(一一八頁)。

(20) 坂部恵『「ふれる」ことについてのノート』の以下の記述を参照——「ふれるというもつとも根源的な経験において、われわれは、自―他、内―外、能動―受動といった区別を超えたいわば相互浸透的な場に立ち会う。たとえば『人目にふれる』というような表現において、能動―受動、主体―客体の別はまださだかでない。あるいはお望みならば両義的であるといつてもよい。われわれは、いつてみれば、そこでそれらの自―他、内―外、能動―受動をはじめとする諸々の差異がそこから発生してくる、ないしはそれまでの差異化の網の目の布置がカタストロフィックな編成変えを受けてあらためて立ち現われてくるその点、ないしは宇宙の力動性の一つの切り口とふれ合うのである」(二五五～二五六頁)——「ふれることは、したがってふれるものとふれられるものの、前もつての一方的分離を前提とするものではなく、何らかの程度において自―他の区別、内―外、能動―受動の区別を含めて、これまでの差異化弁別の体系の構造安定的な布置をあらためて無に帰し、根底から揺り動かす相互嵌入の契機を本質的に伴っている。それはいかえ

れば何らかの程度においてカタストロフィックな経験である」(二七〇頁)。

この、ことばの真の意味において「エッセイ」的な坂部の「ノート」の末尾近くにおいて示唆される(詩へ、いなポイエーシス一般にかんする直観に、本試論の筆者も深く同意するものである——「ここではさまざまな聖語、憑依状態にある巫女や神官のお告げのことは(聖書にいう「異言」)などの出番である。あるいはこれほど極限的な場合を取り上げずとも、一般にいつて、真の創造(ポイエーシス)の根底には、詩といわず、あらゆる芸術的体験の原基となるふれるという経験があるとみることでもできるだろう。おそらく、真の創造(ポイエーシス)とふれるという経験は、一つの同じものにほかならない」(二七四頁)。

ここで坂部が「あらゆる芸術的体験の原基となる(ふれる)という経験」という時、それが「中動態」的な経験を指していることは、おのずと明らかであろう。元来「言語の範疇」に属する「中動態」を「思考の範疇」へと拡張しつつ——さらに「存在論の範疇」をも窺っていると思われる——芸術制作の現場にしつかりと軸足を置きながら包括的かつ洞察に満ちた議論を展開した画期的研究に森田亜紀『芸術の中動態』があるが、それでも紹介されているとおり、ロン・バルトは「書く[*écrire*]」という動詞を「中動態」と別決している(『言語のざわめき』所収「書くは自動詞か?」)。「読む」もまた、もともと根源的な意味において「中動態」であると本試論の筆者は考えるのであるが——バルトが読者を「恋愛主体と神秘主義的な主体」になぞらえていることは(同書所収「読書について」)ゆくりなくもこの見解を支持しているように思われる——そうであるならば、「書くこと=読むこと」(前注の引用参照)とは、畢竟、テキストに〈ふれ/ふられる〉というひとつの「中動態」的な経験——ベンヤミンが「魔術的[magisch]」と呼ぶ直接性の経験(細見和之を参照)——であり、さらにいえば、本試論が構想する「生態学的文学理論」が「(間)テクスト性」理論の再考を通じて接近を試みている(対象⇨客体たたらざる)対象は「恋愛主体と神秘主義的な主体」が立ち上がる(Se-*lever*)「中動態」的な場であるところの(神秘的)〈生〉と不二であると考えられる。

- (21) *Times Literary Supplement*, 958 (27 May 1920) および *Athenaeum*, 4702 (11 June 1920) に発表された、一冊の研究書(A. H. Cruickshank, *Phillip Massinger* (1920)) にたらずに二本の書評(前者は匿名)をひとつにまとめて、処女評論集 *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism* (1920) に収録されたもの。引用箇所は、TLS 書評の部分より。

- (22) 実際、インターテクスチュアリティ的な発想は、エマソンの『代表的⇨代理表象の人間 [Representative Men]』を

貫く経糸である。たとえば、第一論文「プラトン——または、哲学者」の冒頭近くの以下のくだりを参照——「本当の独創家だけが、他人から借りる [borrow] 術を心得ているのだ。(中略)どんな書物もしょせんは引用にすぎず、どのような家も、あらゆる森と鉱山と石切場からの引用であり、どのような人間も、彼のあらゆる先祖たちからの引用にすぎぬ。こうしてこの貪欲な独創家はあらゆる民族に助力をしるのである」(『代表的人間像』六〇七頁)。

(23) 前掲注(21)に示したとおり、この書評論文はエリオットの処女評論集に収録されたものであるが、その後、エリオット本人が編集して世界中で多くの読者を獲得した *Selected Essays* (1932) に再録され、さらには、エリオット没後にフランク・カーモウドが編集した *Selected Prose of T. S. Eliot* (1975) にも(一部省略のうえ)収録されていることからして、決して「マイナーな書評にすぎない」と断することはできず、むしろ、「玄人好み」と言うべきだろうか。

(24) エリオットは、自分の批評活動を振り返る最晩年の講演「批評家を批評する」において、「金銭的な必要にかられて書いていた」というこれら初期の書評・論文の目的は「わたし自身やわたしの友人たちが書いていた種類の詩を擁護することにあつた、と断言している。また、それらの批評活動を、「一般化のエッセイ」と「個別作家の評価」とに分類し、後者の方こそが未来の読者にとってなにかしらの価値を有し続けるだろう、と述べている。皮肉なことに、現実の文学批評史においては、エリオットの希望的観測とは正反対のことが起こり、「フィリップ・マツシンジャー」のような後者の多くは忘れ去られる一方で、前者のエッセイ群(その代表格が「伝統と個人の才能」は、アカデミズム内の「文学理論」の制度化という、およそ「エリオットの」ではありえない運動において、その重要な礎石となる「理論」の数々を提供することとなった。

(25) エリオットは、まるで、クリステヴァの「間テクスト性」理論を「前もって剽窃」しているかのようだ——「模倣 [imitation] は、模倣されるもの(反復されるもの)を顔面どおりに受け取り、それを自分のものにし、相対化する。こたく専有するのである。対立するものを同時に含む言葉 [mots ambivalents] のこの〔第一の〕カテゴリーの特徴は、作者が他者の言葉を活用するけれども、そこに含まれている思想を自分のために損なうことがないという点にある。作者は自分の方向に従うのであるが、方向は相対化されている。対立するものを同時に含む言葉の第二のカテゴリーは、その見本としてパロディを挙げることができるが、それとはまったく異なっている。作者は、他者の言葉に對立する意味を導入するのである。隠れた内面の論争を見本として挙げることのできる、対立するものを同時に含む言葉

の第三のカテゴリリーについていえば、その特徴は、他者の言葉が作者の言葉に積極的な（すなわち変更を及ぼす [modifiante]）影響を与えているということにある。「語っている」のは作者であるが、外からくる言説 [discours étranger] がこの語ることには現存して、それを変形 [déforme] している」（『セメイオナケ 一』七四―五頁）。

(26) 単行本に再録されることもなく長年忘却の淵にあったこの文章も、二〇一四年に刊行が始まった *The Complete Prose of T. S. Eliot: The Critical Edition* 第二巻に収録され、ついに日の目を見ることとなった。

(27) 1) の “secret knowledge” はもちろん、次の引用にある “friendship” “introduction to the society” “its origins and its endings” とびつた表現は、当時ヨーロッパの芸術・思想界に大きな影響力を持っていた神智学協会 (the Theosophical Society)——創始者ブラヴァツキー夫人の名著の英語タイトルは *The Secret Doctrine* である——を、少なくともレントリックのレベルでは、彷彿とさせるものである。エリオットが『荒地』の種本とした Jesse Weston *From Ritual to Romance* が隠れもなき神智学思想の書であることや、エリオットの周囲には A. R. Orage といった重要な神智学徒が少なからずいたことなどを考え合わせると、これらの表現が（たとえその意図がパロディであろうとも）神智学思想圏からの「借用」であることは、ほぼ確実であろうと思われる。その意味では、「伝統 (Tradition)」という鍵語そのものに神智学の影を見ることがすら、不可能ではないだろう。

(28) 先行テクストとの（同）性的関係という点ではなほだ興味深い比較対象として、ドゥルーズの発言を紹介しておく。『哲学史によって虐殺されたにひとしい最後の世代』に属すると自己規定するドゥルーズは、先行テクストとの関係を「おかまを掘る [enculage]」と表現している——「私が当時の状況を切り抜けるにあたって、哲学史とは『おかまを掘る』ようなものだ、というか、これも結局は同じことになるけれども、処女懐胎のようなものだ、と考えていたということだ。私は哲学者に背後から近づいて、子供をこしらえてやる。その子供はたしかに哲学者の子供にはちがいないけれども、それに加えてどこかしら怪物的な面をもっている。とまあ、そんなふうと考えてみたわけだ。子供がたしかに当該の哲学者のものだということはとても重要だ。私が語らせようとしたことを、その哲学者が余すところなくそのとおりに語ってくれなければ困るからね。しかし、子供に怪物じみたところがあるということも、やはりどうして必要だった。それは何もかも中心からずらし、横すべりさせ、すべてを破壊し、ひそかに何かを放出する必要があったからで、私にはそんなことが楽しくてしかたなかったわけだ」（『記号と事件』一七―八頁）。いずれも、旧来の「伝

統」が保持する系譜学Ⅱ家系図から離脱するための単性生殖幻想であるが、一方は「死んだ男」に身を開き犯されることを欲望し、他方は背後から「おかまを掘る」機会をうかがっている。前者がそうやうやって生まれた子(創作)を「全体」の秩序に有機的〔organic〕に統合するために「理論」を導入するのにたいし、後者は奇矯なⅡ脱中心リ的な「怪物」を野放しにして浮かれ騒ぐ〔orgastic〕ことに「哲学」の力を感知する。ここで両者の政治的志向の違いを指摘することはたやすいが、さらに一歩進んで、(テキスト)をめぐる存在論的(信)〔*foi*〕にかんする本性上の差異を見出すことができるのではないだろうか——すなわち、(実在)の根拠を、現存する(フェノリ)テキストの集合がそのつど構成するであろう「全体」の秩序(エネルギーⅡエンテレケイア)に置くか、潜在的(ジェノリ)テキストという「無限の濃度Ⅱ潜勢力〔*puissance*〕」(デュナミス)に置くかによって、「真に新しい」創造がなされる際に、それを「伝統」(というテキスト)が生産的に発展するための過渡的なプロセスと見るか、テキスト生産プロセスそのものの範例的表出と見るかの、本性上の差異が生じることになる。これは、たとえば、両者によるD・H・ロレンス評価の違いといった場面にも表れる差異であるといえる。

(29) ポール・ド・マンは、最晩年の『Anthropomorphism and Trope in Lyric』におけるボードレールの詩「万物照応」の卓抜な読解において、*meta-phorein*を語源的に*trans-port*と結びつけ、さらに後者がパリの地下鉄では「乗り換え」を意味することと戯れてみせた。

(30) マルクス主義批評家フレドリック・ジェイムソンは、『弁証法的批評の冒険』において、エリオット伝統論の同箇所を引用したうえで、「これはもちろん、完全に弁証法的な考え方である。実際、この概念の弁証法的性格は、それとはつきり名指されているわけではないが、それが新たな、いつそうダイナミックな事物の見方として、読者に巧みに伝えられているところに、この文章のもつ修辞的魅力があるだろう」(二七頁)と評価している。

(31) 「コムニタス」は、人類学者ヴィクター・ターナーが『儀礼の過程』(一九六九年)で最初に提唱した概念。部族社会の供犠・祭祀の研究をとおしてターナーが案出した「コムニタスとリミニナリテイ」のダイナミックな理論的枠組によれば、「構造」にはかならずある種の境界性(リミニナリテイ・*limen*Ⅱ敷居)が組み込まれていて、それが供犠や祭祀(ハレ)において瞬間的に「反構造」(いまだ組織化されていない、自由で平等な協同性にもとづく根源的な社会的きずな)を噴出させ「構造」を一時的に不安定化するが、それによってかえって「構造」が活性化され再統合される、とい

うことになる。この理論について、ターナー自身、コーネル大学在職中に同僚の文学理論家などのあいだで活発に行われた異分野交流のたまものであると証言しているが、実際、この「コムニタス」「リミナリテイ（境界性）」の概念は多くの重要な批評理論チーム——たとえば、エドワード・サイードの「故郷喪失者」やメアリー・ルイーズ・プラットの「コンタクト・ゾーン」、さらにはミハエル・バフチンが「クロノトポス」と呼びそれをフリーコーが「他の場所」として展開したようなトポス／トピカ——へと接続が可能であり、筆者の（ややアクロパティックな）考えでは、エリオット「伝統論」についても（潜在的に）通底するものである。

(32) この「伝統論」は、後年、エリオット本人が「秩序」を強調する「正統主義 [orthodoxy]」へと読み替えていく一方で、帝国日本／植民地朝鮮ではまったく違った形で「誤読」されていく。拙論「Metakosたちの帝国——T・S・エリオット、西田幾多郎、崔載瑞」を参照。

(33) 「さてそこで私は次のように主張する。記憶の形成は、知覚 [perception = 現在の事物についてのすべての意識] の形成のあとではなく、それと同時に [contemporan] である」（ベルクソン『精神のエネルギー』一八七頁）。記憶（過去）と知覚（現在）の同時性にかんずるこの有名な箇所は、エリオットが「歴史的感觉／意識 [a historical sense]」を説明するくだりに用いられる “perception”, “contemporaneity” といった用語が著しく類似するため（ただし、その意味内容は一致しない）、「伝統論」執筆の直前に出版されたベルクソンの同書からエリオットが用語を「盗用」したと想像したくなるのだが、その事実関係はさして重要ではない。むしろ問題は、哲学徒時代に学術論文の対象にさえしたところのある『物質と記憶』から着想の一端を得たであろう「現在と過去の同時性」という考え方から、エリオットが、「決定的な結論」をひき出すことができたか否か、ということにある——「現在と過去の同時性という考え方からは、決定的な結論が生まれる。過去は、かつての現在と共存しているだけではない。過去はそれ自体を保存するので（現在は過ぎて行くが）——それぞれの現在と共存するのは、全体としての、統合的な過去であり、われわれのすべての過去である。有名な円錐体の隠喩は、共存のこの完全な状態を表象している」（ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』六一頁）。

なお、エリオットによる「ベルクソン主義への一時的な改宗」、すなわち、哲学徒エリオットによるベルクソン研究の内実および射程については、筆者の博士論文 *Reading T. S. Eliot Reading Spinoza* (Cornell University, 2013) を参照されたい。

- (34) 「記念碑」という表現(および「歴史的感覺」(der historische Sinn))にかんして、筆者は、ニーチェの『反時代的考察』第二論文「生に対する歴史の利害について」からエリオットが着想を得たのではないかと考えているが——エリオットは、故国の母親に宛てた一九一五年一月一日付の手紙において、ニーチェの著作を集中的に読んでいることを記している——周知のとおり、同論文においてニーチェは「記念碑的歴史」(die monumentale Historie)の「利」を部分的に認めつつも、それが「現代の力ある者と偉大な者」(一二二頁)の新たな創造への意志を阻害させるものであるとして(「歴史的感覺」にたいしてと同様に)概して批判的であり、その意味ではエリオットの用法とは相いれないものである。とはいえ、エリオットの眼目が「真に新しい作品」の誕生にあることを考えれば——用語の整合性はとりあえず措くとして——エリオットが(ことに詩作の場面において)ニーチェの批判から読みとったのはむしろ、「ただ現代の最高の力からのみ過去ものを解釈することを許される」「ただ未来の建築者として、現在の知者としてのみそれ(過去)を理解しうる」(一八〇、一八一頁)という命題だったのではないかと思われる。そして、ニーチェが記す「偉人の歴史」から得られる「最高の命令」、すなわち「成熟せよ」(一八二頁)という命令は、そのまま、本試論のタイトルにもある「成熟した詩人は盗む」というエリオットの命題へと引き継がれている、とは言えないだろうか。くわえて、ニーチェによる〈生〉と〈歴史〉との関係にかんする透徹した批判的思索は、本試論の根源にある問い——すなわち、〈生〉と〈テクスト〉の〈あいだ〉への問い——に通底するもので、そのニーチェが「偉大な芸術的能力」(eine große künstlerische Potenz)(一七八頁)にひとつの解を見出したことは極めて示唆的である。(なお、ニーチェ論文にたいする積極的な評価としては、ヘイドン・ホワイ特『メタヒストリー』第九章およびポール・リクール『記憶・歴史・忘却』第三部を参照のこと。)
- (35) この問題については、二世紀の異端者マルキオンの正典(キリシタン)をめぐる文学理論的考察として、稿を改めて論じたい。
- (36) アガンベン『例外状態』第四章「空白をめぐる巨人族の戦い」を参照のこと——「シュミットが自らの著作『政治神学』において展開している主張についての学説は、前節で見たベンヤミンの論考への精細な応答として読むことができる。「暴力批判論」の戦略が純粹でアノミー的な暴力の存在を確証することに向けられていたのに対して、シュミットの場合には、逆にそのような暴力を法的コンテクストのうちに引き戻すことが問題となる。例外状態というのは、彼が純粹暴力というベンヤミンの考えを捕捉し、アノミーをノモスの総体それ自体のうちに書きこもうとするさいに設定さ

れる空間なのである。シュミットに言わせれば、純粹暴力すなわち絶対的に法の外部にある暴力など存在しえない。というのも、例外状態においては、純粹暴力は自らが排除されること自体をつうじて法のうちに包摂されるからである。すなわち、例外状態というのは、全面的にアノミー的な人間の行動についてのベンヤミンの主張にシュミットが返答するために使う装置にはかならないのである」(二〇九頁)。本試論に即して言えば、「備考一」で考察した(テキスト)が孕む存在論的能力〔Vernögen〕〔純粹暴力〕が、「備考二」において概略を示した「伝統」に関する権力〔Macht〕的「決定」によって回収されるメカニズムということになるが、その前提として、「権力〔Macht〕と能力〔Vernögen〕とのあいだには、いかなる決定も埋めることのできない裂け目が口を開けている」(一一三頁)という非一弁証法的な認識があることが重要である。そして、この政治学的な議論は、テキスト理論に転位〔Transposition〕することができ——いや、むしろ、されなければならない——「純粹存在をロゴスの編み目のなかに捕捉しようとしてきた存在——神——学的戦略に、アノミー的な暴力と法とのあいだの関係を保証するはずの例外の戦略が対応している。すなわち、あたかも、法にしてもロゴスにしても、生の世界へのそれらの指示作用を基礎づけうるためには停止というアノミー的な(あるいは無論理的な)地帯を必要としているかのようにして、万事は起きているのである。言語活動は非言語的なものを捕まえることをつうじてのみ存続しうると同じように、法はアノミーを捕捉することをつうじてのみ存続しうるようにみえるのだ。どちらの場合にも、抗争は空虚な空間をめぐる争われているようである。一方はアノミー、法的な空白をめぐる、他方はあらゆる規定およびあらゆる実在的な述語が抜け落ちてしまった純粹存在をめぐる」(二〇頁)。

なお、このアナロジーに託して、「T・S・エリオットという(テキスト)」に対する筆者の見取り図を紹介しておく、「暴力を法的コンテキストのうちに書きこみなおそうと事あることに努めている」シュミットとも見紛う(批評家エリオット)と、「純粹暴力としての暴力に法の外部にあつての存在を保証しようとする」ベンヤミンと親和的な(詩人エリオット)との「空白をめぐる巨人族の戦い」ということにでもなろうかと思つ。

(37) このオチ自体は、マリー・ダリュセック『警察調書——剽窃と世界文学』からの剽窃である——「ピエール・バイヤールが恥ずかしげもなく、二〇〇九年一月にミニニユイ社から出した彼の本『前もつての剽窃』に、私の『警察調書』(二〇一〇年一月刊行)から剽窃したのは疑いもないことだ」(一九一―二頁)。

(38) 冒頭の「定義一」に付した「説明」において、本試論の〈問い〉である「テクストの存在論」と(後期)ハイデガーの「存在の思索」(「存在の家」としての言葉)との親縁性をほのめかしておいたが(前掲注(2))、ここでふたたび、「ヒューマニズム」について『から一箇所引用しておきたい——「存在——それは、神ではないし、また、なんらかの世界根拠でもない。存在は、あらゆる存在者よりも、より広く遙かなものでありつつ、それでいて人間には、どんな存在者よりも、より近いのである。(中略) 存在は、最も近いものである。しかしながら、この近さは、人間には、あくまで、最も広く遙かなものにとどまり続けている」(五八頁)。

(39) クリステヴァのテクスト理論においても、「実在する無限の〈外〉〔un dehors réel et infini〕と「形而上学的な外部〔une extériorité métaphysique〕とは明確に分別されており、後者に依存するあらゆる理論(現前の形而上学)とはさっぱり訣別したうえで「生成〔genetio〕による定義」が試みられていることが、あらためて確認される——「テクストは、その物質的運動のなかで、実在する無限の〈外〉によつて産出され(といつても〈外〉を原因とする「結果」ではない)、自らの特徴の組み合わせのなかに「受け手」を取り込んでいるのであるから、テクストが構成するのは無数の標記と間隙からなる多様性の領域〔une zone de multiplicité de marques et d'intervalles〕であつて、これらの標記と間隙の登記〔inscription〕にあつて中心がなく、そこには統一されることのない多面結合〔polyvalence〕が実現しているのである。テクストにおいてみられるこのような言語の状態——このような実践——は、テクストが、たとえ志向の対象としてであれ形而上学的な外部に、したがつてあらゆる表現主義、あらゆる目的性、いさゝい依存せずに済むようにしている」(「セメイオチケ 一」二三頁、翻訳を一部変更)。この「無数の標記と間隙からなる多様性の領域」とは、まさに、無数 *multiple* の(驥 *plis*)が(あいだ)の痕跡として折り畳まれてある「領域」のことで、本試論冒頭の「公理二」に示され最後の注釈でふたたび扱われることになる「未分化の領域」と呼応している。

(40) なお、この「力」は文脈に應じて〈to hen〉(natura naturans) (la durée pure) (der fremde Gott) (真如) など多様な名(仮名)を持つ「形而上学的窮極者」(井筒俊彦「意識の形而上学」)であるが——これは、「テクストは外〔dehors〕に名を与えることも、限定することもない」(「セメイオチケ 一」一二頁)というクリステヴァの発言にまったく矛盾しない——それを筆者がことさらに〈生〉と名指す根拠は、本試論において(注における散発的な言及をのぞいて)説明されていない。本試論が「予備的考察」と呼ばれるゆえんである。

- (41) Eliot, Valerie, Ed. *The Original Draft*, p. 5.
- (42) エリオットは、「キルケー」を含む三エピソードの原稿を出版前に読み、一九二二年五月二一日付のジョイス宛ての私信で感想を伝えてくる (*Letters* I, pp. 561-2)。
- (43) 試みに、数多ある『荒地』日本語訳の「第一行」を列挙してみよう——「四月は残酷極まる月だ」(西脇順三郎訳)「四月はいちばん無情な月」(深瀬基寛訳)「四月は残酷な月で、死んだ土地から」(吉田健一訳)「四月はもともと残酷な月だ」(中桐雅夫)「四月はこの上なく残酷な月」(福田陸太郎訳)「四月は残酷きわまる月で」(上田保訳)「四月は最も残酷な月、死んだ土から」(岩崎宗治訳)「四月は残酷を極める」(城戸朱理)——ちなみに、井筒俊彦も学生時代に『荒地』を訳したと伝わっているが、どんなものであったか見てみたいものである。こうして見ると、この「命題」が日本語で提示されている以上は、むしろ「かぎりなく真に近い」と言うべきかもしれない。ところで、筆者自身が意識せずに借用していたのは、中桐雅夫が『荒地詩集 一九五三』に発表した訳詩であったことがわかるが、改めてみると、その第一行は読点で終わっており、かろうじてアンジャンプマンの名残を残している。この八つのなかで、句点を打ってアンジャンプマンを明確に拒否しているのは、もともと新しい城戸訳のみである。
- (44) 「音声と意味、韻律上の区分と統辞上の区分という別の形式的対立に基礎づけられないかぎり、このことの意味——おしなべていえば韻律の制度一般の意義——は理解されない。今日の研究者が、アンジャンプマンの可能性のうちに、韻律と散文を区別する唯一のたしかな根拠を認めるようになるのは、上記の対立をことのほか意識しているためである(そうすると、詩は、韻律上の制限——それ自体は散文的な文脈でも起こりうる——を、統辞論上の制限に対抗せざる言説として、逆に散文は、そうしたことが不可能な言説として、それぞれ定義されることになるだろう)」(アガンベン『イタリヤのカテゴリー』六七〜八頁)。
- (45) 「パラグラマチックな意味は、二つの文章が同時に読まれることを必要としている。ディスクールのあいだに対話をおこさせるというこういうやり方が、ロートレアモンの作物ばかりではなく、詩的テキストそのものの一部をなすほどに重要で、しかも詩的テキストの誕生に欠かせない場となっているのがほんとうならば、こういった現象を文学史の全領域にわたって観察することだって、できるはずだ。じつさいそれは、かりにも現代性をもつと言われるほどの詩的テキストにとって、ひとつの基本法則だと言っても、けっして大げさではないほどなのである。現代的テキストは、

相互テクスト的空間〔espace intertextuel〕に入ってくる別のテクストを吸収し、また分裂させながら作り上げられている。諸ディスクールの異和的、連接がおこなわれているわけだ。ポー＝ボードレル＝マルメを結ぶ詩の実践は、今日多くの例が見られるこの異和的連接のもっとも印象的な例である」〔詩と否定性〕『セメイオチケ 二（二四九頁）』。

(46) Eliot Harold Paul(一八九一～一九五八)。マサチューセッツ生まれのアメリカ人。パリではガートルード・スタインのサロンに出入りし、かの有名な「失踪」事件を起こし(「アリス・B・トクラスの自伝」に描かれている)、スペイン内戦に巻き込まれたあげくに米国に戻ると、今度は映画作家として活躍し・・・と、ありとあらゆるジャンルに手を染めたエリオット・ポールは、たんなる「ジャーナリスト」と呼ぶには、あまりに波乱万丈な生涯を送った異形の著述家である。数多くの著作のうち、吉田健一が激賞した『最後に見たパリ』(河出書房新社)は、吉田健一の長女・暁子によって日本語訳されている。

(47) 講演「ポーからヴァレリーへ」(一九四八)においてエリオットは、自分がどの詩人から影響を受け、どの詩人から受けなかったか、だいたい自分でわかっているつもりだが「ポーについては、確信をもってどちらと言える日は決して来ないだろう」(To Criticize the Critic, 二七頁、拙訳)と言っている。

(48) 「引用は言葉を名で呼び出しこの言葉をそれが置かれている連関から破壊しつつ切り出すのだが、しかし、まさにそのことによって、引用はその破壊された言葉をその根源へと呼び戻してもいるのである。引用された言葉は韻を失うことなく、その音を響かせ、調和しながら、新しいテクストの構造のなかに姿を現わす。韻としてのその言葉は、自身のアウラに包まれて、似たものを呼び集め、名としては、孤独に、表現をもたぬまま佇んでいる。言語の前で、この二つの領域——根源と破壊——は、引用においてみずからの正統性を証明する。そして逆に、この二つの領域の浸透しあっているところで——つまり引用において——のみ、言語は完成しているのである。引用のなかには天使の言語が映し出されている」(ベンヤミン「カール・クラウス」『ベンヤミン・コレクション 二』五四四～五四五頁)。

(49) ジャン＝リュック・ナンシーは『脱閉域』所収論文のそこかしこにおいて、〈信 [foi]〉と「信仰 [royance]」とが本質的に異なるものであることを強調する——「信 [foi]の本質は、定義上、あらゆる信仰〔何らかの対象をもつ信仰、信条 croyance〕、あらゆる見積もり、あらゆる自足的経済^{エコノミクス}、あらゆる救済といったものを超えるもの、無化するものへとひたすら語りかけるといふことではない。そこにいかなる高揚感も交えずに神秘家たちがわきまえていたように、

信〔信〕の本質は、世界そのものの、他なるものへとみずからを差し送る＝語りかけること、あるいはそれへと差し送られることである。世界そのものの、他なるものとは、「単数定冠詞付きの」世界そのもの——これはそのつど、容赦なく決定的に終焉、完結する世界である——とは他なるという意味でのみ、「他なる世界」のことである（「慰め、悲嘆」二〇三頁）——ここで、本試論において議論した「他なる時間」も参照のこと。

さらに、「ヤコブの手紙」を読む別の論文（ユダヤ＝キリスト教的なるもの）において〈信〉の「ポイエシス＝プラクシス」の本質を論じるなかで、「この信は、その『行い〔作品 *oeuvre*〕』と同様に、主体の所有＝固有性ではない。この信は願ひ求められるべきもの、受け取られるべきものである——（中略）信は行いのなかにある、信は行いをなし、また行いが信をなす」（一〇〇～一〇一頁）といわれるとき、これが本試論におけるもうひとつの鍵語である（ふれる）の「中動態」的な経験（前掲注〔20〕参照）を指しているというわたしの考えに、読者は同意してくれるだろうか。

これらの鍵語を呼び出して本試論が見出そうとしてきた「テキストの存在論」とは、つまり、ジェノ＝テキストという〈潜在的な全体性〉の「或る十全な実在性」への〈信〉は、テキストに〈ふれ／ふれられる〉という「中動態」的な経験（「書くこと＝読むこと」という〈行い＝作品〉のなかにあり、この〈信〉が〈行い＝作品〉をなし、またこの〈行い＝作品〉が〈信〉をなす、ということ——そして、この〈直観〉がそのつど、[*insight*] 訪れる（あたかも恩寵のごとく・・・）ということ——だったので。（なお、いま一組の鍵語〈となり〉——〈あいだ〉については、注〔54〕で扱う。）

- (50) 「テキスト」概念にかんするロラン・バルトの古典的論文「作品からテキストへ」の、以下のくだりを参照——「『テキスト』を規正する論理は、了解的ではなく（作品が《言おうとすること》を定義するものではなく）、換喩的である。連合、隣接、繰越しの作業は、象徴的エネルギーの解放と一致する（このエネルギーがなければ、人間は死ぬだろう）」

（『物語の構造分析』九六頁）。

- (51) アガンベンによれば、押韻は、「メシア的時間」——本試論の「他なる時間」を思い起こそう——に接するための装置である（『残りの時』一四〇～一四一頁）。

- (52) 「翻訳は、原作の意味にみずからを似せるのではなくて、むしろ愛をもって細部に至るまで、原作のもっている志向

する仕方を己の言語のなかに形成しなければならぬ。そうすることによって原作と翻訳は、ちょうどあのかげらがひとつの器の破片と認められるように、ひとつのより大いなる言語の破片として認識されうるようになるのである」(ベンヤミン「翻訳者の使命」『ベンヤミン・コレクション 二』四〇五頁)。翻訳者の使命とは、すなわち、〈潜在的な全党性〉への〈信〉[*fat*]をもってテクストに接すること以外のなにものでもない。

(53) ここにわたしは、いまひとつ「間テクスト性」の〈襲〉を見出すことになる。エリオットのハーヴァード時代の恩師であり、生粋のルクレティウススピノザ的自然主義者であったジョージ・サンタヤーナが *Character and Opinion in the United States* (1920) のなかで語った、きわめてスピノザ的な〈自然〉観である——「自然は物質的 [material] であるが、物質主義的 [materialistic] ではない。自然は生において流出 [issues in life] し、ありとあらゆる類の温かな感情 [passions] や無為な美を産み出す [breed] のだ」(九九頁)。

(54) 本試論を始めるにあたり、前掲注(4)において、アガンベンの「公法と政治的事実とのあいだ、また法秩序と生 [vita] とのあいだにある、この無主の地 [terra di nessuno]こそ、今回の探究が調べようとする対象である」という言葉を紹介し、本試論は「テクストと生との〈あいだ〉」にある「この無主の地」を探索する企図の端緒を開くための予備的考察であるとの意気込みを語った。日本語においても、この「無主の地」を名指す試みは少なからずあるが——中原中也の「名辞以前の世界」や西郷信綱の「〔前論理的な〕未分の混沌たる全体性」など——なかでもそのイマージュとして実にしっくりくるものに、井筒俊彦の記述がある——

だが、実は、言語は、従って文化は、こうした社会制度的固定性によって特徴づけられる表層次元の下に、隠れた深層構造をもっている。そこでは、言語の意味は、流動的、浮動的な未決定性を示す。本源的な意味遊動の世界。(中略) 連れ合い、絡み合う無数の『意味可能体』が、表層的『意味』の明るみに出ようとして、言語意識の薄暮のなかに相闘ぎ、相戯れる。『無名』が、いままさに『有名』に転じようとする微妙な中間地帯。無と有のあいだ、無分節と有分節との狭間に、何かさだかならぬものの面影が仄かに揺らぐ。

(「文化と言語アラヤ識」『意味の深みへ』一七二頁)

本試論の前半で主題的に取り扱ったクリステヴァの記号分析 [a semantose] の用語でいえば「ジェノリテクスト」——のちに「ル・セミオティック [le semiotique]」「コーラ [chora]」として展開される——が同様の「言語存在のな

かで意味を産み出してゆくものの萌芽〔les germes〕が集まってくる地帯〔zone〕〔「セメイオチケ」一〇頁〕を理論化しているわけだが、それが動的な「過程」訴訟〔process〕「踏破」〔parcours〕として、また、ある種の「潜勢的な」空間」とのかかりで語られることをつけ足しておきたい——「ジェノワテクストはある空間を作り出す欲動エネルギーのただひとつの移動形態となるであろう。この空間とは、そのなかで、主体ははまだ、ル・サンボリックを生じさせるためにかき消えてゆく断層のはいった統一体ではなくて、生物的、社会的拘束をうけて疎通と標識からなる過程によってあるがままの姿で産出されるような空間である」〔『詩的言語の革命』八八頁、翻訳は適宜変更した〕。

ただし筆者は、この〈あいだ〉の領域を、井筒のように深・浅の構造的に捉えるのではなく、むしろ内在平面上に開かれる〈となり〉〔pari〕の空間として思考することが重要であると考えている。「深さ」の隠喩が、ともすると、ある種の「超越」の契機を呼び込んでしまうことをおそれるためである。劇場的な比喩を用いれば、〈あいだ〉は、舞台の奈落にあつて下支え〔substantia〕しているというよりも、むしろ、舞台上でクロスが劇を中断し聴衆に直接語りかけるパラバシス〔parabasis〕〈となり〉の空間に、不意に開かれる領域である（メルロ＝ポンティ風に言えば、「偏差」〔水平的〈となり〉〕が「別の次元」〔垂直的〈あいだ〉〕を不意に「開く」ということになるが、ここでの「垂直的〈あいだ〉」とはあくまで「別の次元」とこの次元との接触の痕跡としてこの平面＝舞台上に現れるもので、決して「深さ」や「高さ」といった属性で表わされるものではない）。そして、それは、本試論の内容とも密接にかかわる「パロディ」〔parodie＝歌のとなり〕の空間でもある——「パロディとは、言語と存在のとなりにあるものについての、あるいは、あらゆる存在およびあらゆる言説のそれら自身とのなりである存在についての理論——および実践——である。（中略）もし存在論が——多かれ少なかれ幸福な——言語活動と世界との関係であるなら、パロディは、準存在論〔parantologia〕であるかぎり、言語が事物に到達することの不可能性と、事物が自らの名前を見出すことの不可能性を表現している。したがって、その空間——文学——には、必然的に、また神学的に、喪と嘲笑が記されている（論理学の空間に沈黙が記されているように）。しかしまた、このようにして、それは言語活動の唯一可能な真実と思われるものを証言しているのである」〔アガンベン「パロディ」『瀆神』七〇～七一頁〕。

なお、「超越／内在」にかんして、アガンベンは、カール・シュミットの《例外状態》理論が孕む本質的な問題を別掲している。シュミットが、「自らを憲法へと構成する権力」と「憲法へと構成された権力」との対置と、スピノザ的

な「産出する自然 [natura naturans]」と「産出された自然 [natura naturata]」との対置のあいだに類比関係を見出していることについて、アガンベンは、「見かけ上そう見えるだけにすぎない」と喝破し、シュミットが前者に絶対的な超越性を認めるのたいていして、スピノザにおいてはあくまで「絶対的に互いが互いに内在しているという関係」であり、一切の超越は認められない、とする（『例外状態』七二―七三頁）。本試論の筆者は、このスピノザ・アガンベンの立場にもとづき、〈生〉と〈テクスト〉とが絶対的に内在する関係にあり、なおかつその関係は決して固定されることなく、あちらこちらの〈となり〉で、不意に、〈あいだ〉の領域を開きつづけるものと考えている。

〔参考文献〕

- ジョルジョ・アガンベン／上村忠男訳『残りの時 パウロ講義』（岩波書店、二〇〇五年）。
- ジョルジョ・アガンベン／上村忠男ほか訳『瀆神』（月曜社、二〇〇五年）。
- ジョルジョ・アガンベン／岡田温司監訳『イタリヤのカテゴリー 詩学序説』（みすず書房、二〇一〇年）。
- ルイ・アルチュセールほか／今村仁司訳『資本論を読む 上』（ちくま学芸文庫、一九九六年）。
- 井筒俊彦『井筒俊彦全集 第八巻 意味の深みへ』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）。
- 井筒俊彦『井筒俊彦全集 第十巻 意識の形而上学』（慶應義塾大学出版会、二〇一五年）。
- ポール・ヴァレリー／清水徹ほか訳『ヴァレリー全集・カイエ篇 八』（筑摩書房、一九八三年）。
- エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ／檜垣立哉ほか訳『食人の形而上学 ポスト構造主義的人類学への道』（洛北出版、二〇一五年）。
- フランチェスコ・ヴィターレ／西山雄二ほか訳『テクストと生物…生物学と脱構築のあいだのジャック・デリダ』（『人文学報 フランス文学』五二―五五、二〇一六年、一六七―一九〇頁）。
- エマソン／酒本雅之訳『エマソン選集六 代表的人間像』（日本教文社、一九六一年）。
- フェリックス・ガタリ／杉村昌昭訳『エコゾフィーとは何か ガタリが遺したもの』（青土社、二〇一五年）。
- 木村敏『あいだと生命 臨床哲学論文集』創元社、二〇一四年。

- ジュリア・クリステヴァ／原田邦夫訳『セメイオチケ 一 記号の解体学』（せりか書房、一九八三年）。
- ジュリア・クリステヴァ／中沢新一ほか訳『セメイオチケ 二 記号の生成論』（せりか書房、一九八四年）。
- ジュリア・クリステヴァ／谷口勇訳『テキストとしての小説』（国文社、一九八五年）。
- ジュリア・クリステヴァ／赤羽研三ほか訳『ポリログ』（白水社、一九八六年）。
- ジュリア・クリステヴァ／原田邦夫訳『詩的言語の革命 第一部 理論的前提』（勁草書房、一九九一年）。
- エドワード・W・サイード／大橋洋一ほか訳『権力、政治、文化 上』（太田出版、二〇〇七年）。
- 坂部恵『「ふれる」ことについてのノート』（『坂部恵集 三』岩波書店、二〇〇七年）。
- フレドリック・ジェイムソン／荒川幾男ほか訳『弁証法的批評の冒険』（晶文社、一九八〇年）。
- スピノザ／島中尚志訳『知性改善論』（岩波文庫、一九三二年）。
- スピノザ／島中尚志訳『エチカ 上』（岩波文庫、一九五一年）。
- スピノザ／島中尚志訳『スピノザ往復書簡集』（岩波文庫、一九五八年）。
- ヴィクター・W・ターナー／富倉光雄訳『儀礼の過程』（思索社、一九七六年）。
- マリリー・ダリュセック／高頭麻子訳『警察調査…剽窃と世界文学』（藤原書店、二〇一三年）。
- 土田知則『間テクスト性の戦略』（夏目書房、二〇〇〇年）。
- 土田知則『ポール・ド・マン——言語の不可能性、倫理の可能性』（岩波書店、二〇一二年）。
- ジャック・デリダ／足立和浩訳『根源の彼方に——グラマトロジーについて（上）（下）』（現代思潮社、一九七二年）。
- ジャック・デリダ／高橋允昭訳『ボジション』（青土社、二〇〇〇年）。
- ジャック・デリダ／高橋哲也ほか訳『有限責任会社』（法政大学出版社局、二〇〇二年）。
- ジャック・デリダ／合田正人ほか訳『エクリチュールと差異』（法政大学出版社局、二〇一三年）。
- ジル・ドゥルーズ／宇波彰訳『ベルクソンの哲学』（法政大学出版社局、一九七四年）。
- ジル・ドゥルーズ／工藤喜作ほか訳『スピノザと表現の問題』（法政大学出版社局、一九九一年）。
- ジル・ドゥルーズ／宇野邦一訳『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』（河出文庫、二〇〇六年）。
- ジル・ドゥルーズ／財津理訳『差異と反復』（河出文庫、二〇〇七年）。

- ジル・ドゥルーズ／宇野邦一訳『フーコー』（河出文庫、二〇〇七年）。
- ジル・ドゥルーズ、宮林寛訳『記号と事件』（河出文庫、二〇〇七年）。
- ポール・ド・マン／土田知則訳『読むことのアレゴリー』（岩波書店、二〇一二年）。
- ポール・ド・マン／富山太佳夫ほか訳『理論への抵抗』（国文社、一九九二年）。
- ジャン・リュック・ナンシー／大西雅一郎訳『脱閉域 キリスト教の脱構築 一』（現代企画室、二〇〇九年）。
- フリードリッヒ・ニーチェ／小倉志祥訳『反時代的考察』（ちくま学芸文庫、一九九三年）。
- マルティン・ハイデッガー／渡邊二郎訳『ヒューマニズム』について（ちくま学芸文庫、一九九七年）。
- ロラン・バルト／花輪光訳『物語の構造分析』（みすず書房、一九七九年）。
- ロラン・バルト／花輪光訳『言語のざわめき』（みすず書房、一九八七年）。
- 廣瀬浩司「次元の開けとしての制度化——メルロ・ポンティの歴史論」（『メルロ・ポンティ研究』第一八号、二〇一四年、六五～七八頁）。
- 廣松渉「世界の共同主観的存在構造」（『廣松渉哲学論集』熊野純彦編、平凡社ライブラリー、二〇〇九年）。
- マルセル・ブルースト／井上究一郎訳『ブルースト全集一〇 失われた時を求めて 第七篇 見出された時』（筑摩書房、一九八九年）。
- ハロルド・ブルーム／小谷野敦ほか訳『影響の不安——詩の理論のために』（新曜社、二〇〇四年）。
- アンリ・ベルクソン／河野与一訳『思想と動くもの』（岩波文庫、一九九八年）。
- アンリ・ベルクソン／合田正人ほか訳『物質と記憶』（ちくま学芸文庫、二〇〇七年）。
- アンリ・ベルクソン／原章二訳『精神のエネルギ』（平凡社ライブラリー、二〇一二年）。
- ヴァルター・ベンヤミン／浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 一 近代の意味』（ちくま学芸文庫、一九九五年）。
- ヴァルター・ベンヤミン／浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 二 エッセイの思想』（ちくま学芸文庫、一九九六年）。
- 細見和之『ベンヤミン「言語」一般および人間の言語について』を読む——言葉と語りえぬもの』（岩波書店、二〇〇九年）。
- ルイス・ホルヘ・ボルヘス／木村榮一郎編訳『カフカとその先駆者たち』（『ボルヘス・エッセイ集』平凡社ライブラリー、

- 二〇一三年)。
- 三原芳秋『Meroikosたちの帝国——T・S・エリオット、西田幾多郎、崔載瑞』(『社会科学』四〇巻四号、二〇一一年、一〜四二頁)。
- モーリス・メルローポントイ／竹内芳郎ほか訳「間接的言語と沈黙の声」(『シーニュ』一)みすず書房、一九六九年)。
- モーリス・メルローポントイ／滝浦静雄・木田元訳「見えるものと見えないもの 付・研究ノート」(みすず書房、一九八九年)。
- 森田亜紀『芸術の中動態——受容／制作の基層』(萌書房、二〇一三年)。
- ロマン・ヤロコブソン／川本茂雄監修『一般言語学』(みすず書房、一九七三年)。
- ポール・リクール／久米博訳『記憶・歴史・忘却』(新曜社、〈上〉二〇〇四年〈下〉二〇〇五年)。
- ミカエル・リファテール／斎藤兆史訳『詩の記号論』(勁草書房、二〇〇〇年)。
- Barthes, Roland. "Texte (Théorie du)". *Encyclopaedia Universalis*. Vol.23. Paris: Encyclopaedia Universalis France, 2003 (1973): 518-521.
- Barard, Pierre. *Le plagiat par anticipation*. Paris: Minuit, 2009.
- Culler, Jonathan. "Presupposition and Intertextuality". *The Pursuit of Signs: Semiotics, Literature, Deconstruction*. Enlarged Ed. Ithaca: Cornell UP, 2002.
- De Dijn, Herman. "Historical Remarks on Spinoza's Theory of Definition". J. G. van der Bend, Ed. *Spinoza on Knowing, Being and Freedom*. Assen: Van Gorcum, 1974. 41-50.
- . "Conceptions of Philosophical Method in Spinoza: *Logica and Mos geometricus*". *Review of Metaphysics*, 40.1 (Sept. 1986): 55-78.
- De Man, Paul. "Anthropomorphism and Trope in Lyric". *The Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984.
- Derrida, Jacques. "Living On / Border Lines". Trans. James Hulbert. *Deconstruction and Criticism*. New York: Seabury Press, 1979: 75-176.

- . “But, beyond . . . (Open Letter to Anne McClintock and Rob Nixon)”. Trans. Peggy Kamuf. *Critical Inquiry*, 13.1 (Autumn 1986): 155–170.
- Eliot, T.S. “Reflections on Contemporary Poetry [IV]”. Cuda, Anthony, and Schuchard, Ronald, Eds. *The Complete Prose of T. S. Eliot: The Critical Edition: The Perfect Critic, 1919–1926*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2014. Project Muse.
- . *The Sacred Wood: Essays in Poetry and Criticism*. 2nd Ed. London: Methuen, 1920, 1928.
- . *Collected Poems 1909–1962*. London: Faber, 1963.
- . *To Criticize the Critic and Other Writings*. Lincoln: U of Nebraska P, 1965.
- Eliot, Valerie, Ed. *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound*. San Diego: Harcourt Brace, 1971.
- , & Hugh Haughton, Eds. *The Letters of T. S. Eliot*. Vol. 1. Rev. Ed. London: Faber, 1988, 2009.
- von Harnack, Adolf. *Marcion: Das Evangelium vom Fremden Gott: Eine Monographie zur Geschichte der Grundlegung der Katholischen Kirche*. Leipzig: J. C. Hinrichsische Buchhandlung, 1921.
- Heller-Roazen, Daniel. *The Enemy of All: Piracy and the Law of Nations*. New York: Zone Books, 2009.
- Kristeva, Julia. “Nous Deux or a (Hi) story of Intertextuality”. *The Romantic Review*, 93 (1–2). New York: Columbia UP, 2003. 7–13.
- Mallarmé, Stéphane. *Œuvres complètes*. Paris: Gallimard, 1945.
- Mihara, Yoshiaki. *Reading T. S. Eliot Reading Spinoza*. Ph.D. Dissertation. Ithaca: Cornell University, 2013.
- Paul, Elliot Harold. “The waste land (as it might have been written by T. S. Eliot had he lived in Boston)”. Typescript. n.d.
- T. S. Eliot Collection of Papers, Berg Collection, New York Public Library.
- Santayana, George. *The Gentle Tradition in American Philosophy and Character and Opinion in the United States*. Ed. James Seaton. New Haven: Yale UP, 2009.
- Valery, Paul. *The Art of Poetry*. Trans. Denise Follot. Intro. T. S. Eliot. New York: Bollingen, 1958.

〔付記〕

本稿は JSPS 科研費15H03202 (基盤研究 (B)) 「文学理論の生態学的転回にむけた学際的共同研究」(研究代表者：三原芳秋) の助成を受けた研究成果の一部である。